第3回東アジア日本研究者協議会国際学術大会

感情の東アジア史
ールサンチマンをめぐる死者と生者の語り合いー

分科会 G3
〈資料集〉

KYOTO RESEARCH PARK
2018年10月27日(土)

漢陽大日本学国際比較研究所
http://gcjs.hanyang.ac.kr

セッション番号:G3

<パネル趣旨>

感情の東アジア史

－ ルサンチマンをめぐる死者と生者の語り合い －

本パネルは、ルサンチマンをめぐる死者と生者の語り合いを社会文化史の立場から跡づけ、中・近世の東アジア世界における感情の地形図を追求するものである。人間とAIの共存や融合が現実のものとなりつつある今日、我々は、人間らしさとは何か、という問いに改めて直面している。本パネルは、この問いを真摯に受け止め、理性偏重の風潮のなか、かつて否定的に捉えられがちだった感情に着目する。その際、死者をも視野に入れるべく、憤り・怨恨・憎悪・嫉妬・非難など、多彩な感情のスペクトルを呈するルサンチマンをキーワードとし、感情の東アジア史という新たなる地平へ挑戦したい。

本パネルは、「剪燈新話、金鰲新話、雨月物語: 「越境」する怨恨と変容する物語」、「幽霊は何を語りかけてくるのか:　近世の韓・日幽霊譚の比較を通じて」、「「王」の非業の死と分岐する想像力」など、三つの発表で構成される(いずれも仮題)。これら三つの発表は、ともに中・近世の東アジア世界で流通していた説話や小説を主な分析対象とするが、さらに、次のことを共通認識としている。すなわち、①東アジアという方法としての広域(region)には、人とモノとがダイナミックに動き回る学知ネットワークが想定される、②このネットワークは複数の地域(local)へ複雑多端に張り巡らされており、地域の間ではテキストをめぐって絶え間なく参照・衝突・断絶・飛躍・変容が起こる、③こうした構図のもと、地域の単一性(singularity)は、あくまでも繰り返し再構成される、④単一性は、丹念かつ繊細なテキスト分析を通して捉えられるが、この作業は、生き生きとした感情の地形図を描くことにもなる、ということである。本パネルの試みが、感情の深層を探る、さらなる挑戦への堅固な踏み台になることを期待する。

プログラム

司会：

李康民 (イ・カンミン、漢陽大)

発表：

1. 李世淵 (イ・セヨン、漢陽大)
「「王」の非業の死と分岐する想像力」 1

2. 金京姫 (キム・キョンヒ、韓国外大)
「剪燈新話、金鰲新話、雨月物語: 越境する怨恨と変容する物語」 13

3. 李市俊 (イ・シジュン、崇実大)
「戦前、在朝日本人による朝鮮の鬼神研究について」 25

コメンテーター

1. 近藤瑞木 (こんどう みずき、首都大学東京)
2. 韓京子 (ハン・キョンジャ、慶熙大)
3. 村上謙 (むらかみ けん、関西学院大)

「王」の非業の死と分岐する想像力

：崇徳院と端宗をめぐる伝承の比較検討

李世淵 (漢陽大比較歴史文化研究所)

Ⅰ. はじめに

❍ ルサンチマンをめぐる韓国と日本の差 → 恨(ハン) vs 怨(ウォン)。
韓国の恨(ハン)は、直接的な復讐などはなされず、容易く解消されない蟠り。
日本の怨(ウォン)は、直接的に鬱憤を晴すことで解消されるもの。
分かりやすく、大体頷ける言説だが、国民国家単位の文化論として問題あり。
自明なことという認識のためか、具体的な比較検討は殆んどなされず。

❍ 試みに、「王」の非業の死をめぐる想像力を比較検討。
崇徳院(1119−1164)と端宗(ダンジョン、1441−1457)。

❍ 国家レベルの鎮魂の様相を確認した上で、伝承を検討。
その際、先行研究を踏まえ、地域(local)による相違や、記憶の(再)構成過程に注意。

Ⅱ. 崇徳院怨霊譚とすれ違う視線

1. 崇徳院の鎮魂

❍ 尊重されない崇徳院の死。国家レベルの服喪なし。

❍ 1176 年以降、崇徳院怨霊への意識が芽生える。
後白河院と藤原忠通の近親者の相次ぐ死、京都の大火災、強訴の頻発。

❍ 1177 年には、「崇徳」の諡号を贈り、成勝寺で法華八講を営む。

❍ 治承・寿永の乱の勃発や長期持続から、崇徳院怨霊のさらなる跳梁が想像される。
血書五部大乗経の噂(1183 年)、法住寺合戦の勃発(1184 年)。

❍ 粟田宮の建立(1184 年)をもって崇徳院怨霊への国家の対応は、一段落。

2. 京都: 歴史を動かす怨霊

❍ 崇徳院怨霊譚の原型、『保元物語』(史料1①②)
血書、天狗、魔王というキーワードを介し、崇徳院怨霊は、歴史を動かす怨霊として描かれ、記憶されてゆく。

❍ 延慶本『平家物語』からも同じパターンが確認される(史料2)。

❍ 崇徳院怨霊は、南北朝時代にも日本国の歴史に介入する存在として記憶される。
『太平記』(史料3)。

❍ 斯くして「京都文化圏」[1)]で形作られた、「崇徳院怨霊＝歴史を動かす怨霊」という記憶は、幅広く流布。
『保元物語』・『平家物語』・『太平記』の諸本、『白峯寺縁起』、『松山天狗』など。

❍ 近世には出版文化と相まって、崇徳院怨霊は、より細密に形象化されてゆく。
『雨月物語』、『椿説弓張月』(史料4①②)。

❍ 幕末にいたると、「崇徳院怨霊＝歴史を動かす怨霊」という記憶は、現実政治にも働き掛けるようになる。
保元の乱以来の武家政権の長期持続は、崇徳院怨霊の祟りによる、という発想。
『玉襷』、『玉襷総論追加』(史料5①②)。京都白峯宮の創建へ。

3. 讃岐: ローカル化する祟りと地域の守護神

❍ 配流先の讃岐では、地元ならではの伝承が流布。
崇徳院領を兵粮料所とした細川繁氏の急死から、崇徳院怨霊の祟りを想像。
『太平記』、『金毘羅参詣名所図会』(史料6①②)。

❍ 讃岐現地の状況と関わり、特定の人物が祟られる伝承は、ほかにも。
1671～1672 年頃、直島の領有をめぐる権力移動(高原氏→三宅氏)の正当化。
「由緒写」(史料7)。

❍「京都文化圏」で生産された伝承も、地元の文脈で潤色される。
「崇徳院怨霊＝歴史を動かす怨霊」という言説にはあまり関心が示されず、讃岐現地の地名や環境を充実に反映する描写へ集中。「大乗経伝」『故新伝』(史料8)。

❍「王」の非凡さは、地域の守護神という脈絡でも表象される。
「新院御遊覧」『故新伝』(史料9)。

---

1) 京都および畿内地域を生活圏としていた皇族や貴族、僧侶などの文化活動が直接影響を及ぼした圏域。

Ⅲ. 端宗冤魂譚と交叉する視線

1. 端宗の鎮魂

❍ 叔父(世祖[セジョ])に王位を簒奪され、江原道寧越(ヨンウォル)に流されていた端宗(ダンジョン)は、1457 年のさらなる復位運動へ巻き込まれ、非業の死を遂げる。
実録には、「自ら縊り卒す、禮を以てこれを葬る」とあるが、その痕跡はみえず。

❍ 王朝の対応は、1516 年に一変。
中央政界に進出した史林派[2)]が、「無主孤魂」になりかけていた端宗の致祭や立後をとりあげる。寧越の地方官による定期的致祭＋右承旨の申鏘を遣わし致祭。

❍ 1516 年の議論では、端宗の冤魂への意識が垣間見られる(史料 10①②)。

❍ 1541 年の寧越郡守の相次ぐ横死からも端宗の冤魂が想像されていた(史料 11)。

❍ 17 世紀半ばには、＜災異の発生→端宗の鎮魂＞のパターンが確認される(史料 12①②)。

❍ 国家の鎮魂は、1689 年の復位をもって一段落するが、その際にも災異が問題視された形跡がある。申奎の上疏(史料 13)。

❍ ただ、注意されるのは、朝廷において端宗の冤魂は、あくまでも儒教的価値観や世界観の範囲内で浮彫りになり解消されたこと。端宗の冤魂は、儒教的義理や名分の文脈で照明されたわけで、世祖あるいは靖難功臣[3)]への復讐を通したルサンチマンの解消などは想像されなかった。厲祭が王の教書をもって執り行われる世界において、冤魂はあくまでも王権による徳治や救恤の客体であり、王権を相対化しうる主体ではありえなかった。

2. 漢陽: 対抗記憶の登場

❍ 端宗に関する伝承は、死の風景を中心に形成された。それは、配流先の寧越から発信されたものと推察される(史料 14)。

❍ 端宗に関する伝承は、国家レベルの致祭が行われた 1516 年以後に表面化。
申鏘の復命を踏まえた伝承が流布。賜死が確認され、残酷な最期が描かれる。王朝の公式記憶に亀裂が生じる。

---

2) 朱子学を学問的基盤とし、儒教的義理、名分を重んじた政治勢力。

3) 首陽大君(後日の世祖)は、1453年に政治的ライバルを次々と除去してゆくが、この一連の過程で功をたてた人々に「靖難功臣」の称号が贈られた。

大司憲・漢城判尹・刑曹判書を歴任した李耔(1480−1533)の『陰崖日記』(史料 15①)
大司憲・禮曹判書・吏曹判書を歴任した李堅(1522−1600)の『松窩雑説』(史料 15②)。

3. 寧越とその他: 還流する記憶と地域の守護神

❍ 対抗記憶は、漢陽以外の地域でも流布していた。
大邱に居住したいた朴宗祐(1587−1654、死六臣の一人朴彭年の末裔)の『丙子録』(史料 16)。
賜死に関わった人物の実名、一層劇的な描写。

❍『丙子録』に採録された伝承は、やがて王権によって認定される(史料 17)。
王朝側の記憶が公式的に否定される。おそらく 15 世紀に寧越現地から発信された伝承や対抗記憶は、16 世紀に漢陽で具体的に形象化され、17 世紀にいたって全国的な規模で流布し、王朝の公式記憶を圧倒することになった。

❍ ただ、配流先の寧越では、ひと味違う伝承も流布。
「王」の非凡さは、現地の脈絡から受け止められた。地域の安寧や個々人の日常と密接に関わる地域の守護神(史料 18①②③)。
崇徳院伝承と似通った構図がみえてくる。

Ⅳ. おわりに

「王」の非業の死をめぐる想像力は、地域(region/local)により様々の形で溢れ出された。日本で「王」の非業の死は、怨霊の蠢動を想像させた。「王」の怨霊は、個人レベルの復讐のみならず、日本国の歴史に積極的に介入する存在としても想像された。それは、王権を相対化する力をもっていた。ただ、この想像は王権の所在地を中心になされ、他の地域においては相当違う様相をみせた[4]。「京都文化圏」で生産された「王」の怨霊譚は、地域社会の実情や脈絡に沿って潤色され、地域の守護神として和やかな顔をした「王」も想像され記憶された。

「王」の非業の死は、韓国においても冤魂の蠢動を想像させた。だが、「王」のルサンチマンが噴出されるのは、あくまでも儒教的価値観や世界観の範囲内においてであった。「王」の冤魂は、基本的に治者や生者にとって管理や救恤の対象であった。王権を相対化したり個人的な復讐を試みる「王」の冤魂は想像されなかった。王権が長い間賜死を否定した事情もあって、

4) 永仁4年(1296)に成立した『関東御式目』の跋文には、「僕また申して云く、武州禅門崇徳院後身ト申し説き候、権化人也、仍って神妙に候か」とみえる。著者の「僕」は、六波羅奉行人の斎藤唯浄。

端宗をめぐる伝承は、死の風景の描写に集中された。「王」の無念の死を語る対抗記憶は、複数の地域の間を還流しつつ整えられていった。他方、「王」が流され死んでいった寧越では「王」の非凡さが地域の守護神という脈絡で想像され記憶された。

「王」の非業の死に関する伝承に地域的な差が存在するということは、韓国と日本に共通している。とくに目立つのは、「王」が死んでいった讃岐と寧越から見いだされる独自の伝承である。地元の人々は、「王」が流され死にいたった政治的経緯より、むしろ自分たちの日常へ「王」の非凡さが如何なる影響を及ぼすのか、神経を尖らせていた。「王」の霊魂が生前の政敵に復讐する話を具体化することは、彼らの想像力とはまず無縁のものだった。彼らの想像力は、地域社会の安寧や個々人の日常と関わってこそ濃密に繰り出された。

こうしてみると、「王」のルサンチマンをめぐる韓国と日本の差は、究極的には王権の所在地における伝承や記憶の差、さらにいえば、そうした伝承や記憶の差を形作る知の体系やマンタリテの差によるものといえるのではなかろうか。儒教の浸透の程度、生者と死者の関係についての感性から、両地域の分かれ道を探り当てることもできるだろう。

ただ、一つ喚起したいのは、韓国にもルサンチマンを直接解消する事例が少なからず存在するということである。韓国にも「儒教以前」の時代が存在したし、儒教が浸透した時代にも直接的な復讐を試みる冤魂は想像された。恨と怨の文化論は、果たして検証済みの言説なのか。疑問符を投げ掛けつつ、さらに比較を試みてゆきたい。

【史料】

史料1① 半井本『保元物語』「新院血ヲ以テ御経ノ奥ニ御誓状ノ事 付ケタリ崩御ノ事」
我願ハ五部大乗経ノ大善根ヲ悪道ニ抛テ、日本国ノ大悪魔ト成ラムト誓ハセ給て、御舌ノ崎ヲ食切セ座テ、其血ヲ以テ、御経ノ奥ニ此御誓状ヲゾアソバシタル。其後ハ御グシモ剃ズ、御爪モ切セ給ハデ、生ナガラ天狗ノ御姿ニ成セ給テ、中二年有テ、平治元年十二月九日夜、丑剋ニ、右衛門督信頼ガ左馬頭義朝ヲ嘩テ、院ノ御所三条殿へ夜討ニ入テ、(中略) 一年セ保元ノ乱ニ乙若ガ云シ詞ニ少モ違ズ。

史料1② 陽明文庫本『保元物語』「新院御経沈めの事 付けたり崩御の事」
吾深罪に行れ、愁欝浅からず。速此功力を以、彼科を救はんと思ふ莫太の行業を、併三悪道に抛籠、其力を以、日本国の大魔縁となり、皇を取て民となし、民を皇となさんとて、御舌のさきをくい切て、流る血を以、大乗経の奥に、御誓状を書付らる。願は、上梵天帝釈、下堅牢地神に至迄、此誓約に合力し給やと、海底に入させ給ひける。

史料2 延慶本『平家物語』「讃岐院之御事」
御グシモメサズ、御爪ヲモ切ラセ給ハズ。柿ノ頭巾、柿の御衣ヲ召ツヽ、御指ヨリ血ヲアヤシ、五部ノ大乗経ヲアソバシテ、(中略) 吾此ノ五部ノ大乗経ヲ三悪道ニ投籠テ、此大善根ノ力ヲ以テ、日本国ヲ滅ス大魔縁トナラム。天衆地類必ズ合力給ヘト誓ハセ給テ、海底ニ入レサセ給ニケリ。

史料3 『太平記』「大稲妻天狗未来記の事」
上座に見る金の鵄こそ崇徳院にて度らせ玉へ。(中略) 今云に集まり、天下を乱すべき御評定にてあり。

史料4①『雨月物語』 巻之一「白峯」
汝しらず、近来の世の乱は朕なす事なり。生てありし日より魔道にこころざしをかたふけて、平治の乱を発さしめ、死て猶、朝家に祟をなす。見よみよ、やがて天が下に大乱を生ぜしめん。(中略) 所詮此の経を魔道に回向して、恨をはるかさんと、一すぢにおもひ定て、指を破り血をもて願文をうつし、経とともに志戸の海に沈てし後は、人にも見えず深く閉こもりて、ひとへに魔王になるべき大願をちかひしが、はた平治の乱ぞ出できぬる。(中略) 平氏も又久しからじ。雅仁朕につらかりしほどは終に報ふべきぞ。

史料4②『椿説弓張月』 前編巻之六　第十五回
いざさらばこの経文を魔道へ回向し、われ生ながら魔王となりて、憎しとおもふ義朝信西等はいふもさら也、雅人にもうきめ見せてんと誓をたて、日となく夜となく懸念怠らざるかひありて、まづ信頼義朝に謀反のこゝろをつけて、信西を殪させ、又義朝をば家隷長田に討せて、父を誅するの天罰を示し、又清盛に驕奢のこゝろを憑て、雅人を押籠させ、すべての讐は過半ころし剿しつ今は清盛が氏族親族のみ残れり。見よ／＼、久しからずして、彼等をば当国へば引よせて、この海原の水屑となさん。

史料5①『玉襷』
偖つら／＼中ツ世の乱れたりし其ノ根本を按るに、枉神の荒びは元よりなれど、最も畏き、崇徳天皇の大御怒りより発れるにや、と所思ゆる由あり。

史料5②『玉襷総論追加』
其ノ本タル粟田ノ宮は、既く御跡さへ知られぬばかりに成果たるは、いかに慨く悲き事の極みならずや、然れば朝廷の御稜威衰へさせ給ひて、権威の武家に移りしも、其ノ根本は此ノ天皇の大御怒より起れるならむと云へるも、杜撰には非ず。

史料6①『太平記』「細川式部大輔霊死の事」
この人まづ讃岐国へ下って、兵船をそろへ軍勢を集むる程に、延文四年六月二日、俄に病付きて物狂になりたりけるが、自ら口走って、我、崇徳院の御領を落して、軍勢の兵粮料所に宛て行ひしによって、重き病を受けたり。天のせめ八万四千の毛孔に入って五臓六腑に余る間、冷しき風に向へども、盛んなる炎の如く、ひややかなる水を飲めども、わきかへる湯の如し。あらあつや、堪へがたや、これ助けてくれよと、悲しみ叫んで悶絶僻地しければ、(中略) 病付いて七日に当りける卯の尅に、黄なる旗一流さいて、混甲の兵千騎ばかり、三方より同時に時の声を揚げて押し寄せたり。(中略) 搦手より寄せける敵かと覚えて、紅の母衣かけたる兵十余騎、大将細川伊予守の頸と家人行吉掃部亮が頸とを取って鋒に貫き、悪しと思ふ物どもをば皆打ち取ったるぞ。これ見よや、兵どもとて、二つの頸を指し上げたれば、大手の敵七百余騎、勝時を三声どっと作って帰るを見れば、この寄手天に上り雲に乗り、白峰の方へぞ飛び去りける。

史料6②『金毘羅参詣名所図会』
この地は崇徳院の御廟領なれば、深く敬して軍律を厳重にす。(中略) 延文三年、伊予守繁氏、御領を掠めて神罰を蒙りし事あるにより、讃岐守持隆厳しく乱妨狼藉を禁止し、制札を出だすとなり。

史料7「由緒写」(『三宅家文書』 所収)
高原者、新院之院宣ニ背壱人直島押領仕候故、院之蒙御神罰候哉、此度家及滅亡申候。

史料8 『故新伝』「大乗経伝」
朕か調し経文是より魔神に誓ひ、朕魔界の帝王となり、朕に敵するものそれ／＼討亡さんと逆鱗まし／＼、御髪冠を貫か如しとなり、(中略) 白峯江登らせたまひて御経文に御生血をそゝき、大槌と小槌島の間に沈めたまへは、忽一天かき曇り、雷電震動し、虚空より黒雲降り、潮は瀠流をなしけり、雲中にハ数万の天狗顕れ出て、海中より其の大さ小島の如き亀浮ミ出、御経文の御箱をくわへ吹き出せは、虚空へはるかに舞昇りける、其時中央に新院御すかた烟の如く露れ、左の御手に重色の鳶のかたちをなせし鳥を携給ひける、天狗御経文と共に守護奉り、白峯の方へ去りたまふ御有様、御供いたしたるものともなけきしことかきりなし。

史料9 『故新伝』「新院御遊覧」
ある日南の浦辺にいてまし給ひけるふし、沖の方俄に暴風起り大船小船波の間にしつめんとするを天覧ありて、不便なることゝおほしめして龍神へ御祈念有しかハ、波たち所に静りもとの和風間と成れけハ、船もつゝかなく助りける。

史料10① 『中宗実録』 中宗11年(1516)10月29日条
久く君臨をなし、天地間の厲鬼となり、和氣未だ暢びずして厲氣となる。

史料10② 『中宗実録』 中宗11年(1516)10月22日条
況や魯山、事勢に迫る。其れ冤魂とならしむるを忍ばんや。

史料11 『宣祖修正實錄』 宣祖14年(1581)2月1日条
(寧越)郡に妖孽あり、官吏多く暴死す。人おもえらく、魯山の祟りなりと。

史料12① 『孝宗實錄』 孝宗4年(1653)7月3日条
魯山墓、寧越にあり。往ぬる祖宗朝に在りて、邊官を遣し、致祭す。今則ち久く廢す。若し舊典を擧ぐれば、則ち其れ消沴求雨に、助け無しとせず。

史料12② 『顯宗實錄』 顯宗3年(1662)6月20日条
頃年、魯山、燕山墓、別して近臣を遣し、致祭の典あり。今、災異の孔極なるに當り， まさに此の擧あるべし。

史料13「申奎の上疏」(『莊陵誌』 所収)

比者、灾孽荐ねて臻り、年穀大く侵す。これにより以て飢饉重り、これ以て疫癘し、八路の生齒、半ば已に鬼たるかな。(中略)　匹夫匹婦の幽枉と雖も、以て少しも人情を厭ふもの有れば、追って昭雪を加へ、曲く慰悦の道を施さざるはなし。況や堂堂たる千乗の尊、后妃の貴、生きて欝結の恨あり、死して尊崇の典無し。年代いよいよ遠く、公論いよいよ憾む者か。

史料14 『謏聞鎖錄』(『莊陵誌』 所収)

魯山、変に遇ふや、即時に雷雨大く作り、咫尺たるも人物を辨へず。家奴石池の父、時に行商す。寧越に適き、その変を見たりと、石池余のために云ふ。

史料15① 『陰崖日記』(『大東野乗』 所収)

丙子十二月二十五日、右承旨申鏑、魯山致祭より還りて來たる。魯山墓、寧越郡西五里の路邊にあり。頽墮して高さ僅か二尺ばかりなり。叢塚、傍らに列す。而して邑人君王墓と傳へ稱す。孩幼と雖も亦能く識別す。且つ諸塚皆石を以て傍らに列す。而して獨り此れ無しと云ふ。當初不諱の日、鎮撫來りて刑に莅み、逼りて自盡す。尸を外に暴するも、邑宰および從人、陰威に劫え、敢へて收斂することなし。

史料15② 『松窩雜說』(『大東野乗』 所収)

魯山君、寧越郡に遜し、清朝ごとに大廳に出づ。袞袍を着し榻に據りて坐す。見者、敬を起さざるは無し。一日、禁府都事下去するも、門隙よりこれを望み、瞿然として退縮し、敢へて手を下さず。日將に暮れ、都事、其の後時の責あるを恐れ、榻下の小吏とこれを謀る。長き繩を以て、坐後の窓穴よりこれを引く。繩足らず、布帶を以て繼ぎ、卒にこれを縊る。

史料16 『丙子録』(『莊陵誌』 所収)

禁府都事[王邦衍]、賜藥を奉り寧越に到るも、踟躇し敢へて入らず。邏將、時刻遲れ誤つを以て、立ちて頓足す。都事、已むを得ず、庭中に入りて伏す。魯山、翼善冠袞龍袍を具して、堂中に出御し、所以を問ふ。都事、以て答へ無し。一貢生あり、常に魯山に侍したる者、自らこれに當るを請ふ。一條の弓弦を以て頸に繫け絶す[松窩雜記に曰く、長き繩を以て、坐後の窓穴より、これを引く。繩足らず、布帶を以て継ぎ、これを縊る]。時に年十九[或は十七と云ふ]、これ二十四日酉時なり[貢生、行きて未だ出門せず、九竅流血し、卽斃す]。侍女從人、爭ひて郡の東江に投じ、浮屍、江に満つ。この日、雷雨大く作り、烈風木を拔き、黑霧空を彌くし、夜を經るも散ぜず。

史料17 『肅宗實錄』 肅宗25年(1699)1月2日条

君臣の大義、天地の間に逃るる所なし。而して端宗大王、寧越に避きたる時、禁府都事王邦衍、郡に到るも踟躇し、敢へて入らず。其の庭中に入侍するに及び、端宗大王、冠服を具し、堂中に御し、所以を問ふ。邦衍、以て答へをなさず。彼奉命の臣を以て、猶且つ此の如し。而るに、其の時、貢生の常に前に侍したる者、乃ち、自ら忍ばざる所に當るを請ふ處、便卽ち九竅流血して斃る。

史料18① 『陰崖日記』(『大東野乗』 所収)

邑人、今に至るまで哀慟し、祭を設け、以てこれを祭る。吉凶禍福に至るまで、皆祀に就く。婦女と雖も、猶傳說を分明す。

史料18② 『丙子録』(『莊陵誌』 所収)

時に境内旱す。香を焚き、天に祷らば、雨輒ち注ぐ。

史料18③ 『莊陵誌』

魯山、常に客舍に御す。村氓の邑中者、輒ち來り樓下にて謁す。害に遇ふの日に及び、村氓、また事を以て官に入る。路にて、魯山、白馬騰踢に乗り、東谷へ上るに遇ふ。而して去るに氓伏して道傍にて謁し、官家將に何處へ向はんと問ふ。魯山、顧みて謂ひて曰く、吾れ將に太白山に往かんと。氓拜送し官に入る。則ち魯山已に害に遇ふ[越郡諺伝]

【参考文献】

최길성,「恨의 象徵的 意味」,『비교민속학』4, 1989.

최길성,『한국인의 한』, 예진사, 1991.

B. 왈라번,「朝鮮時代 厲祭의 機能과 意義: '뜬귀신'을 모셨던 儒生들」,『동양학』31, 2001.

김효경,「단종 제사와 신앙의 전개 과정: 정부 및 민간 차원을 중심으로」,『역사민속학』22, 2006.

최명환,「단종설화의 전승양상 연구」, 강원대학교 대학원 국어국문학과 박사학위논문, 2006.

이욱,『조선시대 재난과 국가의례』, 창비, 2009.

안병국,「怨靈端宗 研究: 解寃과 鎭魂을 중심으로」,『어문론집』48, 2011.

김정녀,「「奈城誌」의 공간과 기억의 재구성」,『민족문학사연구』49, 2012.

김영두,「亂言과 隱居, 세조 정권에 저항하는 대항 기억의 형성」,『사학연구』112, 2013.

김유리,「조선시대 재난상황과 사자(死者) 인식에 관한 연구: 여제(厲祭)의 실천을 중심으로」, 서울대학교 대학원 종교학과 석사학위논문, 2016.

정환국,「조선전중기 원혼서사의 계보와 성격」,『동악어문학』70, 2017.

水原一,「崇徳院説話の考察」,『平家物語の形成』, 加藤中道館, 1971.

落合博志,「清原良賢伝攷: 南北朝末室町初期における一鴻儒の事蹟」,『能: 研究と評論』 16, 1988.

本多典子,「『白峯寺縁起』覚書き: 讃岐と都・地方と中央」,『伝承文学論<ジャンルをこえて>』, 東京都立大学大学院人文科学研究科国文学専攻中世文学ゼミ, 1992.

山内益次郎,「崇徳院慰霊」,『今鏡の周辺』, 和泉書院, 1993.

二本松泰子,「崇徳院: 讃岐配流説話・直島の崇徳院伝承をめぐって」,『講座日本の伝承文学 第8巻 在地伝承の世界 西日本』, 三弥井書店, 2000.

山田雄司,『崇徳院怨霊の研究』, 思文閣出版, 2001.

山田雄司,「直島における崇徳院伝承」,『三重史学』 10, 2010.

呉妍淑,「日本·李朝の怨霊思想の比較: 巫俗神と端宗」,『年報地域文化研究』4, 2000.

斎藤吉勝,「「白峯」と崇徳院御霊信仰に関するノート」,『国語国文』 49, 2010.

山田雄司,「讃岐国における崇徳院伝説の展開」,『瀬戸内海』 64, 2012.

伊藤秋穂,「崇徳院伝承の諸相: 享受の位相を中心に」,『長野国文』 22, 2014.

中川和明,「平田国学による祭祀の創意とその波紋:『毎朝神拝詞記』・『玉襷』を例に」,『書物・出版と社会変容』19, 2015.

剪燈新話、金鰲新話、雨月物語

：越境する怨恨と変容する物語

金京姫(韓国外国語大)

1．はじめに

近世期の日本文学史における主な文化的流れと交流に関する記述は、ほとんどが中国文学の受容と変容に関するものである。中国から儒学という学問と小説が日本に伝わった結果、不安だった中世期の日本を脱皮して、政治的安定を図るとともに、多様な江戸文化を花咲かせた滋養分になったという評価が支配的だからである。しかし、当時の東アジアにおいては、中国・朝鮮・日本を中心とした三ヵ国間の文化や思想史的な面での流れと交流があったことを知ることができる。代表的な例として、中国古今の怪談奇聞を綴って書いた明代唯一の文語体小説集である『剪燈新話』(1378)は、中国で禁書の措置を受けながらも、李禎の『剪燈餘話』、邵景詹の『覓燈因話』などに影響を与えた。朝鮮では、金時習の『金鰲新話』(朝鮮前期、15世紀)と　尹春年と林芑の『剪燈新話句解』(1559)に、日本では『伽婢子』(1666)『雨月物語』(1776)、ベトナムでは『傳奇漫録』(16世紀)の作品につながるなど、東アジア各国の伝奇小説創作に大きな影響を与えた。

当時、江戸時代には『剪燈新話』の伝来がきっかけとなって、『三國志演義』『水滸傳』などと三言二拍[1)]の小説が伝わり怪奇小説が大流行した。代表的な儒学者の林羅山(1583−1657)は、近世期に中国と朝鮮の儒教文化をいち早く受け入れて、日本社会に紹介し、江戸時代の文芸復興と儒教文化を形成する基盤を作ったという点で注目を集めてきた。今までの林羅山を通じた文学史の流れに関する研究を見てみると、彼の中国文献の受容に集中されて、日本と中国の交流史の立場から研究が行われてきており[2)]、林羅山が入手した朝鮮経由文献の系統と彼の朝鮮文献受容作品が日本の怪談小説に与えた影響については研究が充分に行われていない状況である。

これについては、韓国の方でも似たような様相を見せる。ほとんどの関連研究は、韓国と中国の文化交流史の観点から議論が行われてきた。日本の儒学者林羅山に関する研究は、丁酉再乱の際、日本に捕虜として連れて行かれて抑留中の姜沆との学術交流を通じた思想的影響

1) 明末期の通俗小説集で、馮夢龍が編集した『喩世明言』(1621)『警世通言』(1624)『醒世恒言』(1627)の三言と凌濛初の『拍案驚奇』(1628)『二刻拍案驚奇』(1632)の二拍を総称する言葉である。

2) そのほか、朝鮮との交流では、日本思想史の分野において徳川幕府の政治的顧問の役割を担当した儒学官僚林羅山が朝鮮第一の儒学者李退溪から大きな影響を受けたという多くの研究成果がある。

の関係について焦点があてられるだけで、日本の文芸分野の朝鮮古典文学作品受容に関してはまだ本格的な研究が行われていない。

ここでは、東アジア文化圏での伝奇小説の交流を再照明したい。そのため、中国の『剪燈新話』の影響下に創作された朝鮮の『金鰲新話』と日本の怪談小説『雨月物語』を研究対象として検討を進める。『剪燈新話』には、21編[3]の多くの短編作品が収録されており、『金鰲新話』には、5編[4]の作品が残っており、『雨月物語』には、9本の話が構成されている。

ところが、この作品は、互いに一作品ずつ参考にしたものではなく、複数の話から、全体的な話形やモチーフを導入している場合が多く、事実上、全体的な比較は困難である。したがって、これを検討するために、三作品の内容を比較した後、それぞれの作品に関する多くの先行研究の成果の主要典拠研究を参考にして、分析対象の作品を選定した。『金鰲新話』の中「李生窺墻傳」の場合、物語の前半は『剪燈新話』の「翠翠傳」から基本的叙事を取っているが、後半の叙事は「愛卿傳」を典拠としている。これに比べて、『雨月物語』の中「浅茅が宿」の全体的な叙事は「愛卿傳」を典拠としている。

このような点を考慮して、『金鰲新話』の「李生窺墻傳」と『雨月物語』の「浅茅が宿」を考察の対象としたい。全体的に、この三つの作品は生者と死者との出会いと別れ、そして、邂逅を取り扱っているが、典拠作品である「愛卿傳」と比較してみると、朝鮮の「李生窺墻傳」と日本の「浅茅が宿」からは典拠作品とかなり異質な要素を見出すことができる。このような点を介して、両作品の全体的叙事を中心にして比較し考察してみる。また、「愛卿傳」[5]については、すでに先学たちの研究においてほとんど取り上げられたと思われるので、別に項目を置かず、朝鮮と日本の作品を分析するとき、比較的時点で一緒に言及することにする。

2.『金鰲新話』と「李生窺墻傳」

中国の『剪灯新話』が朝鮮に伝来し、梅月堂 金時習(1435−1493)が、その影響で韓国初の漢文小説であり、伝奇小説の嚆矢と呼ばれる『金鰲新話』を著述したことは周知の事実である。また、通常、金時習を尊重して崇められた滄洲 尹春年(1514−1567)が梅月堂の詩文を収集整理

3) 「水宮慶會錄」「三山福地志」「華亭逢故人記」「金鳳釵記」「聯芳樓記」「令狐生冥夢錄」「天台訪隱錄」「藤穆醉遊聚景園記」「牡丹燈記」「渭唐奇遇記」「富貴發跡司志」「永州野廟記」「申陽洞記」「愛卿傳」「翠翠傳」「龍堂靈會錄」「太虛司法傳」「修文舍人傳」「鑑湖液泛記」「綠衣人傳」「秋香亭記」

4)「萬福寺樗蒲記」「李生窺墻傳」「醉遊浮碧亭記」「龍宮赴宴錄」「南炎浮洲志」

5) 「愛卿傳」のあらすじは、以下の通りである。愛卿は浙江省嘉興の才色兼備の有名な遊女であった。同じ村に住んでいる高い身分の趙生という男が愛卿を妻として迎えた。しばらくして趙生は親戚の推薦で官職につくことになり、大都へ赴いた。ところが、到着してみると、親戚は病気ですでに官職を辞めていた。趙生が大都で逗留しているうちに、母は愛卿の看病にもかかわらず亡くなる。一人残った愛卿は戦乱の中で貞節を守るために自殺する。故郷に戻ってきて妻の死を知り悲しむ趙生の前に現れた愛卿は遊女出身の自身を愛してくれた夫に感謝の気持ちを伝える。愛卿は現世で男の子に生まれ変わったことを知らせた後、消える。その後、趙生は愛卿が生まれ変わった宋氏家を訪れ、両家は親戚になる。

し、垂胡子　林芑が集釋した『剪灯新話句解』の刊行に直接関与した事実はよく知られている。それでは、以下に、『金鰲新話』の中「李生窺墻傳」の概要を簡単に紹介する。6)

(1) 松島に住む李生という者は、いつも国学に行くとき、大家の娘である美しい崔氏の家の北側の墻の外を通って行っていたが、ある日は、恋の詩を三首作り、白い紙に書き付けて瓦礫に結び付け、家の中にほうり投げた。
(2) 二人は愛し合うようになったが、親の反対により李生が蔚州に送られる。
(3) 崔氏の娘の李生への愛情と努力により、二人は夫婦になる。その次の年、李生は科挙に合格し、高い官職についた。
(4) 間もなく紅巾賊の乱が起こり、崔氏は盗賊の剣に無残に殺される。
(5) 深い悲しみに堪えられずに苦しんでいる李生の前に、崔氏の娘が現れてきて、再び二人は一緒に過ごすようになった。
(6) 数年が経ったある日、　崔氏は自身の遺骨を拾い集めてもらうことをお願いし、この世に別れを告げてから跡形もなく消えてしまった。
(7) 李生は妻の骨を見つけ、両親の墓に合葬したあと、といとう病気になり、数か月して無くなった。

上記の全体的な叙事を見ると、男主人公の李生(イセン)と女主人公の崔氏の娘(チェラン)は、最初、出会い、お互いに恋するようになったが、親の反対により初めての別れをして、その後、再び会って夫婦になったが紅巾賊によって妻が殺されることで、二人は二つ目の別れをすることになる。そして、死んだ崔氏が李生の前に現れて来て、二人は三つ目の出会いにつながるが、最後には、亡者の妻崔氏はこの世と別れをしなげればならなくなる。要するに、この話の全体には二人の出会いと別れが繰り返されていることが分かる。また、愛する人との別れが繰り返される度に、女主人公崔氏の恨(ハン)が深められて行くことを感じる。次の各段落の内容を詳しく見てみる。

まず、二人の男女主人公の李生と崔氏の娘はお互いが相反するような性格の所有者として登場する。(1)を見ると、李生が勉強のため国学に通うとき、美しい崔氏の娘を覗いては、心惹かれて次の内容の詩を彼女に伝えている。

李生: この縁は好因縁でしょうか、それとも悪因縁でしょうか。
　　いたずらに憂い、一日は一年に感じられる。

6) 『金鰲新話』「李生窺墻傳」の本文引用は『梅月堂金鰲新話』(承應二年本、1653、早稲田大学中央図書館古典籍 請求記号: 文庫19 F0189)による。日本語訳は、『金鰲新話-訳注と研究』(早川智美、和泉書院、2009)による。以下、「李生窺墻傳」のテキストとする。

二十八字のこの詩がすでに我々の媒をしてくれた。
いつになったら藍橋で神仙のようなあなたに出会えるのでしょう。7)

崔氏: どうかあなた様はお疑いになられませんように。日暮れに会う約束をいたしましょう。8)

李生は、崔氏に向かう自分の感情を詩を介して表出し、彼女の住む家の中にほうり投げたにもかかわらず、そこに書いてある詩の内容は「良い縁になろうか、悪い縁になろうか」と愛の感情の前でためらって躊躇する姿があらわれている。そのような李生に比べ、崔氏は、すぐに自分の心を表現して断固として積極的な態度を見せる。次を見ると、二人が情を結んだ後も、李生は彼女との関係が両親や家の中に知られることを恐れて、なお消極的な態度を取っていることが分かる。

李生: いつかこの春の宵のことがもれたとき、
情容赦なくふりそそぐお叱りがあるかと思うと、心配になります。9)

崔氏: 私はもともとあなた様に妻としてお仕えし、ながく歓びをともにしたいと思ってお りましたのに、どうしてあなたは急にそんなことをいうのです。私は女であるとはいっても、心は泰然としていてひろく、男まさりの意気があります。どうしてそんなことをおっしゃるのです。後日、この常時が両親に知れ、父母が私を責めるようなことがあったとしても、私は身をもって父母と向き合うつもりです。10)

李生が不安な気持ちを詩に寄せて読むと、崔氏は自分の愛の行動に対して非常に進歩的で積極的な態度で相手の男を率いている。このようにして二人は恋仲になるが、(2)で、李生は、親の反対により蔚州に送られる。崔氏は、何も言わずに去ってしまった李生を想いながら、死をも辞さない覚悟で彼との愛を守ろうと努力する。

崔氏: あの憎らしいお方のために賈午のようにひとたび香をぬすんで、あの方との深いご縁を結んでから怨みも深まりました。私は小さな體で、ひとり耐え忍んでおりました。しかしこの想いは日に日に深くなり、病は日に日に重くなりました。今、死の際にあって、幽霊のような姿になろうとしています。もしもお父様、お母様が私の願いをかなえてくださるのならば、きっと私は生きのびることができるでしょう。もしも願いがかなわなければ、このまま死んでしまうかもしれません。そのときは李生さまと、ふたたびあの世で楽しみを分かちたいと

7) 好因緣邪惡因緣 空把愁腸日抵年 二十八字媒已就 藍橋何日遇神仙.

8) 將子無疑 昏以爲期.

9) 他時漏洩春消息 風雨無情亦可憐.

10) 本欲與君 終奉箕帚 永結歡娛 郎何言之若是遽也 妾雖女類 心意泰然
丈夫意氣 肯作此語乎 他日閨中事洩 親庭譴責 妾以身當之.

思います。私は他家には嫁ぎません。[11)]

上記の文章を見れば、李生が結んだ縁を置いて何の抵抗もしないまま離れてしまったことが崔氏の心の中に怨みとして積もっていることが推測できる。そして彼女は、そのような現実に対して命をかけてでも自分の意志を貫こうとする人間の姿を見せてくれる。結局、崔氏の努力で二人は再会するようになり、夫婦になった。さらに、李生は、科挙に合格して、高い官職についた。

(4)では、　間もなく起こった紅巾賊の乱で、李生はなんとか逃げおおせたのだが、崔氏は盗賊の捕虜となった。賊が崔氏を手にかけようとしたとき、彼女は次のように大いに賊を罵って言った。

崔氏: この畜生どもめ！いっそのこと私を喰らっておしまい！お前たちのような卑しい者　の手に落ちるくらいなら、いっそ喰らわれて、やまいぬや狼の腹の中に葬られたほうがましだわ！[12)]

このように崔氏は盗賊に対抗し屈せずに節義を守りぬいたが、結局は盗賊によって彼女は無残に殺され、彼女の身は切り裂かれてしまった。(5)では、妻の死を知って日々を嘆き暮らしている李生の前に崔氏が現れてきて、自分に起こったことを話す。

李生は妻がすでに死んでしまったということを知ってはいたものの、李生は妻をことのほ　か情厚く愛しみ、怪しまなかった。ふと李生は妻に問うた。
李生:無事だったのは、一体どこに逃げていたのだね。
妻は李生の手をとって、慟哭して心のたけを述べた。[13)]

崔氏: (前略) 私はついに紅巾賊どもにこの身をゆだねることはせず、自ら身を引き裂かれ　て、泥にまみれる方を選んだのです。その行為を選んだことは、もともと天が私に与えた運命であるとはいえ、人間として耐えられることではありませんでした。かえって崖であなたと別れ、まるで離れ離れになったおしどりのようになったことが恨めしく思われました。今、家は滅び、親も亡くなりました。この世に残っている魂のよるべがないことをいたましく思います。義は重く、命は軽い。この残された死体が辱められていないことを願うのみです。誰かこの切り刻まれた身を野にさらされ、身は泥にまみれています。細やかに昔の歓び

11) 然而彼狡童兮 一偸賈香 千生喬怨 以眇眇之弱軀 忍悄悄之獨處 情念日深 沈痾日篤 濱於死地 將化窮鬼 父母如從我願 終保餘生 倘違情款 斃而有已 當與李生 重遊黃壤之下 誓不登他門也.

12) 虎鬼殺啗我 寧死葬於豺狼之腹中 安能作狗彘之匹乎.

13) 生雖知已死 愛之甚篤 不復疑訝.避於何處 全其軀命.女執生手 慟哭一聲.

をかわしたことを思い出せば、今日のような境遇はまったく恨めしいばかりです。[14)]

愛する妻が盗賊に捕らわれることを見ていても、自分の命を保全するために隠れているしかなかった男は、彼女の死を知りながら亡者の姿で現れた崔氏に、「無事だったのは、一体どこに逃げていたのだね？」と尋ねている卑怯な人間の姿を見せている。作者は李生が妻をことのほか愛するからだと記しているが、それは他でもない消極的であり、不安で意志が弱かった李生の面貌を物語っている。そんな李生に比べ、崔氏は盗賊に汚されるよりは堂々と死を選ぶことができたと言いながら、それは人情にはできないことだったが、天性のために可能だったと述べる。彼女にとって、節義が命よりも大事であることを証明したことだった。その一方で、自分が惨めに死んでしまって、李生と末永く添い遂げられなかったことを怨み、悲しみを吐露している。そして、亡者の身でありながらも李生との愛を守ろうとする。しかし、最終的には三回の出会いと別れを繰り返した末、崔氏は李生とのこの世での最後の別れをするようになる。 (7)では、そのような崔氏を送りながら、李生が初めて自分の意志で行動する人間に変貌することを伺い知ることができる。以下は、本作品の最後の部分である

弔いがすべて終わり、李生はまた妻のことばかりを思い煩っていた。それで李生は病気に　なり、数か月して亡くなった。その話を聞けば皆、悼み嘆いて、彼らの義理堅いことを慕わないものはなかった。[15)]

結局、崔氏だけでなく、李生も悲劇的な人物で生を終えている。最後の「彼らの義理堅いことを慕わないものはなかった」という文章を介して、李生が最後に見せてくれたのは自分自身の意志として節義を守ろうとした行動であったと物語っている。臆病で消極的な人間であった李生は崔氏という女性を通して初めて節義を守る人間に変貌することができた。そのため、「李生窺墻傳」の悲劇は読者に感動を与えているものである。

3.『雨月物語』の「浅茅が宿」

上田秋成が書いた『雨月物語』は、刊行後に再刊行に続いて第三版が刊行されるなど、怪談として好評を得た。『雨月物語』は怪談として持つ幻想性について指摘がなされて、怪奇小説の研究が早くからなされてきた。作品の中の主題が明快で小説的構成が卓越なことにより、

14) (前略)終不委身於豺虎 自取磔肉於泥沙 固天性之自然 匪人情之可忍 却恨一別於窮 崖竟作分飛之匹鳥 家亡親沒 傷殯魄之無依 義重命輕 幸殘軀之免辱 誰憐寸寸之灰心 徒結斷斷之腐腸 骨骸暴野 肝膽塗地 細料昔時之歡娛 適爲當日之愁寃.

15) 既葬 生亦以追念之故 得病數月而卒 聞者莫不傷歎 而慕其義焉.

日本怪奇小説史上最高傑作と評価されたことがある。

それではここでは、『雨月物語』の方を見てみることにしたい。「浅茅が宿」[16]の概要を簡単に紹介すると次の通りである。

①下総の国葛飾郡の真間の郷に住む勝四郎は、没落した家の再興を計画し、妻の宮木に秋に は帰って来ることを約束して上京する。

②関東は戦乱によって混乱している中、宮木は夫の帰りを信じて待ち続けたが、約束した秋 になっても勝四郎は帰って来なかった。

③京都に行った夫は絹商売で成功を収めた後、急いで故郷に帰ろうとするが、途中で山賊に襲われて、全てを奪われてしまったので、落胆して帰郷を断念する。

④異郷で7年の歳月を送った夫は、ある日、ふと自分の無関心さに気づき、故郷に帰ることにする。

⑤故郷に帰ってきた夫は妻宮木と再会して一晩を過ごす。

⑥翌日、宮木が残した和歌を発見した夫は、初めて妻の死を実感し、大きく泣いて倒れた。

⑦漆間の翁に会って、妻の最後の話を聞いては、手児女の伝説よりもさらに深い切なさを感じる。

上記の全体的叙事を通じて、男主人公の勝四郎と女主人公の宮木との間に葛藤が生じて互いに別れを経験し、非現実的な世界を借りて再び再会が行われるが、最後には完全な別れをしていることが見られる。妻宮木の心の中には、夫を待っている心と夫を恨む心の相反する二つの心が存在するのを窺い知ることができる。次の各段落の内容を確認してみよう。

①の本文の最初の部分には、男主人公の性格が次のように描写されている。

> 生長て物にかかはらぬ性より、農作をうたてき物に厭ひけるままに、はた家貧しくなりに けり。いかで浮木に乗つもしらぬ国に長居せん。葛のうら葉のかへるは此の秋なるべし。心づよく待ち給へ。

勝四郎は、生来の物事にかまわない性質から、家業の百姓仕事を嫌なこととして嫌った人物である。そのため、当然のことながら多かった財産を使い果たして、家の中は没落するしかなく、親戚たちもそのような不誠実な彼を歓迎するはずがなかった。それでも彼は親族の冷遇の原因が家運が傾いたせいだと思い、なんとか家を起こしたい気持ちで一攫千金を夢見て商売に行こうとするのだった。そのような夫を眺める妻は不安で悲しい気持ちになるしかな

16) 本文引用は『英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』(高田衛校注、新編日本古典文学全集78、小学館、1995)による。以下、「浅茅が宿」のテキストとする。

い。いくら本気で引き止めても聞かない夫なので、仕方なく妻はすぐに帰って来ることをお願いする。夫は、今年の秋には、戻ってくるのだから待ってくれという約束を残して去る。

②で夫が去り、間もなく戦乱が起きたが、夫の約束だけを信じて一人残って待っている妻宮木の心中には待つ心の切実さと無頓着な夫に対する恨む心が積まれることがわかる。

> 秋にもなりしかど風の便りもあらねど、世と　ともに憑みなき人心かなと、恨みかなしみおもひくづをれて、
> 身のうさは人しも告じあふ坂の夕づけ鳥よ秋も暮れぬと

一方、③で京都に行った夫は戦乱の知らせを聞いて家に帰ろうとするが、故郷への道が塞がれた状況に置かれると、次の引用に見るように、彼の天性のとおりに、すぐに帰郷を諦めてしまう。

> さては消息をすべ　きたづきもなし。家も兵火にや亡びなん。妻も世に生てあらじ。しからば古郷とても鬼のすむ所なり。

夫の一言に死をも辞さずに待つ妻の状況と比べてみるとき、夫の何の躊躇もなく妻が待っている故郷を「鬼がすむ所」と思ってしまう態度はあまりにも対照的である。この点が本作品を悲劇に導いていく最大の要因であると言えよう。

⑤では、妻宮木が家に帰ってきた夫に会って、次のような言葉を残している。

> 今は長き恨みもはれば　れとなりぬる事の喜しく侍り。逢を待間に恋ひ死なんは、人しらぬ恨みなるべし。

妻は死んでからも待ち続けながら、亡者の身で夫を迎えている。上記の宮木の言葉には、自身の心を理解してくれない夫に対する恨みが残っていることが分かる。最後に、⑥に至って翌日、妻が残した和歌を発見した夫は、初めて妻の死を知るようになる。

> さりともと思ふ心にはかられて世にもけふまでいける命か

宮木の和歌には、彼女の二つの心が表現されている。一つは、夫の約束を信じて彼が帰って来るのを願う心であり、もう一つは、結局、夫は帰ってこないことを知ってしまった心であろう。その夫に対する怨望さえも、自分自身の心にだまされてしまったと言いながら直接的に恨みが向かない。そんな妻の心を知らない夫を死者になってからも待つ女の悲しむ心が作品

全体の叙事を導いていると言える。

⑦では、漆間の翁を通じて真間の手児女の伝説[17]を聞いて比較することにより、宮木の話をさらに切なく感じさせてくれている。つまり、手児女は自身を恋慕する多くの人々の心に報いようと海に身を投げて死んだのに対し、宮木の行動は、約束を破ってしまっても何とも思わない夫のために痛ましい苦しみの中で寂しく死んで行ったのである。そして、亡霊になってまで、夫との約束を守ろうとしたという点において、宮木の話は手児女の物語より深い感動を与えてくれるということができる。

4. 越境する怨恨と変容する物語

ここでは、「李生窺墻傳」と「浅茅が宿」の作品分析を基に二つの作品に用いられている恨みのモチーフについて比較的視点から見てみよう。まず、両作品で最も重要視することは何かという点について考える。「李生窺墻傳」の場合、それは「節義」ということを簡単に知ることができる。崔氏は死を覚悟して「節義」を守ろうとし、それによって無残に殺された。その後も李生との節義を守るために亡者の身で李生の前に現れる。したがって、彼女の節義は称賛を受けるだろう。それなら彼女の節義は果たして何なのか。それは李生との愛を守ることだと言うだろう。李生との関係を探ってみると、両親の反対という逆境を克服し、積極的に自分の愛を実現しようとする姿がよく表れている。親が決めた人を自分の配偶者として受け入れる当時の恋愛慣習から考えるときに、非常に逸脱的なものである。そこには、他人の意志や意図が全く見えない。二人が互いに愛するようになる過程においても、自分たちの意志とコミュニケーションがベースになっている。まさに彼女は、節義のために、自分の志と意図を堂々と行動で示している女性ということができる。

一方、「浅茅が宿」で示すものは愛をベースにした約束、すなわち「信義」ということができる。宮木は死ぬまで待ち続けている、そして、死んで亡霊になってまで待つ女の姿を見せている。しかし、作者の意図する全体的なテーマは、実際そこにとどまらない。結局、夫が帰って来ないことを知りながら、帰って来ると信じ続けて待っている自分の心に騙されるしかない境遇とそのような自分の心を分かってくれない無頓着な夫に対する恨みの心が作品の中に引用された歌を介して切なく伝わっているのである。

夫に対する節義と信義を守ろうと、自分の意志を持って自主的に行動した崔氏と宮木の話は典拠作品である「愛卿傳」の話が「孝」と「節」そして「操」という儒教的美徳の支配を受けていることと大きく異なる点である。愛卿は遊女であり、趙生は一族の家の息子として、彼らの愛

17) 真間の手児女伝説とは、貧しいが美しい手児女が多くの男性に求愛を受けたが、最終的にすべての人々の心に報いようと、海に入水自殺したという話である。

は、互いに尊敬と礼儀をベースにしている。愛卿が節を守るために死を選ぶのだが、死んだ後趙生の前に現れて来た理由は遊女の身分だった自分を愛してくれたことに対する感謝の気持ちを表現するためである。それは、お互いへの愛と見るより、自分を妻として迎えてくれた夫への感謝を示すためであったといえよう。

もう一つ、「李生窺墻傳」の崔氏と「浅茅が宿」の宮木は節義と信義を守るために自身の命を捨てたのだが、それに対する補償は与えられいないことである。この点も両作品の典拠作品である「愛卿傳」と「浅茅が宿」の典拠作『伽婢子』の「藤井清六遊女宮城野を娶事」とも明確に異なる点といえる。「愛卿傳」の愛卿は死んだ後、宋氏の家に羅生という男の子に生まれ変わり、以後も　趙生と親戚の縁を結び、「藤井清六遊女宮城野を娶事」の宮城野も死んだ後、裕福な鎌倉の家に男の子に生まれ清六とは一族として往来したという話で終わりを結んでいる。

三つ目は、男主人公の人物設定に関するものである。「李生窺墻傳」の李生は儒教の影響下にある非常に消極的な人物である。愛の前にためらって躊躇する姿を見せたり、女性と縁を結んだ後にも不安を感じて疑う人物だった。そのため、父親の反対にぶつかったとき、何の抵抗もせずに去って行ったし、紅巾賊の侵入から最愛の妻を守ろうと努力もしていなかっただろう。

「浅茅が宿」の勝四郎も家事に囚われることを嫌い、難しい農作業をうんざりする人物である。そのような性質のために、自分自身を引き止める妻を置いても「今年の秋に帰ってくる」という約束を残して去り、戦乱により故郷に帰る道の都合が悪くなると、他郷で七年の歳月を送ることが可能だった。しかし、両作品とも男主人公は自身の過ちを悟って成長するようになる人間の救いが設けられている。彼らは女性の崇高な犠牲によって初めて「節義」を守る人間と「信義」が何なのかが分かるようになる人間に変貌しているのだ。

最後に、二つの作品を見てみると、女主人公がそれぞれ節義と信義を守ろうとすればするほど、彼女たちの心の中に恨みが深くなることがわかる。崔氏は愛する人との節義を守ろうとするが、現実には、親の反対と戦乱の危険さとこの世とあの世という生の岐路に遮られてしまい、怨恨を感じるしかない。宮木も信義を知らない夫の約束の言葉を信じて待つしかない境遇と自身の心を分かってくれない夫、夫との疎通ができない心で彼女の怨恨は深まるしかないだろう。そのため、死んで亡霊になってまで、夫を待つような超現実世界の宮木の姿は、悲しみを越えた悲劇的に感じられる。

これらの点は、典拠作品である「愛卿傳」や『伽婢子』の「藤井清六遊女宮城野を娶事」の話では全く見ることができない部分ということができる。

5. おわりに

以上、本発表では、近世期の東アジア文化圏の伝奇小説の流れを探ってみるため、中国の『剪燈新話』の影響下に創作された朝鮮の『金鰲新話』と日本の怪談小説『雨月物語』の作品を選定し検討してみた。具体的に、「李生窺墻傳」と「浅茅が宿」の両作品を比較対象として考察した結果、両作品とも典拠作品である「愛卿傳」から叙事的な側面で影響を受けたのは事実であるが、「愛卿傳」の原作では見られない要素が二つの作品から共通点や類似点として指摘された。それは、伝奇小説として個人の欲望と彼らが属している社会の支配的な論理がぶつかり葛藤が生じたとき、それに対する解決策として非現実的な世界に連れて行く人物たちの姿が描かれていることである。たとえ、非現実的で幻想的な物語の形式をとってはいるが、その中に作者自身の現実的で進歩的な人間観が強く反映されているということができる。

文学作品を伴った朝鮮と日本の思想と文化的な側面の交流を明らかにすることにより、近世期の東アジア文化圏の流れに対する再評価が行われれることを期待する。

【参考文獻】

井上泰至『雨月物語論ー源泉と主題ー』笠間書院、1999

鵜月洋『雨月物語評釈』角川書院、1969

高田衛校注『英草紙西山物語雨月物語春雨物語』新編日本古典文學全集78 小學館、1995

長島弘明「『雨月物語』の男と女の「性」」『秋成研究』東京大學出版會、2000

中村博保「浅茅が宿」の文章」『上田秋成の研究』ぺりかん社、1999

末木文美士『近世の仏教』吉川弘文館、2010

井上泰至・田中康二編『江戸の文学史と思想史』ぺりかん社、2011

小松和彦編『妖怪学の基礎知識』角川選書、2011

諏訪春雄『日本の幽霊』岩波新書、1988

大桑斉『民衆仏教思想史論』ぺりかん社、2013

大桑斉・前田一郎編『羅山貞徳『儒仏問答』註解と研究』ぺりかん社、2006

高田衛『江戸の悪霊払い師』ちくま学芸文庫版、1994

前田勉「神・仏・儒の三教と日本意識」『シリーズ日本人と宗教』2、春秋社、2014

末木文美士「近代の来世観と幽冥観の展開」『シリーズ日本人と宗教』3、春秋社、2015

キムキョンミ「伝奇小説のゼンダー化されたプロットと閉ざされた美学を超えて」『韓国古典女性文学研究』、2010

キムキョンヒ「『浅茅が宿』に見られる俳諧的手法」『日本研究』38、2008
キムチャンヒョン「『金鰲新話』「李生窺墻傳」の悲劇性とその美学的機制−浪漫性と悲憤慷慨の悲劇性を中心に−」『溫知論叢』28、2011
ムンヨンオ「「金鰲新話」に屈折した恨の考察−「萬福寺樗蒲記」「李生窺墻傳」「醉遊浮碧亭記」を中心に−」『韓国文学研究』10、1987
ソルチュンファン「 李生窺墻傳 : 分析心理学から読む」『韓国学研究』21 、2004
世宗大王記念事業「李生窺墻傳」『国訳梅月堂集』3 世宗大王記念事業会、1978
チェヨンチョル「『金鰲新話』朝鮮刊本の發堀とその意義」『民族文化研究』36 民族文化研究院、2002
『金鰲新話の版本』国学資料院、2003

戦前、日本人による朝鮮の「鬼神」の研究について

: 村山智順『朝鮮の鬼神』の前史

李市埈 (崇実大)

最近、私は「日本古代文学における「物の気」「鬼」を韓国語でどう翻訳すべきか一韓国語版『源氏物語』の翻訳の例を中心に一」という拙論で、1978年から1985年にわたって民間から採集した『韓国口碑文學大系』の用例を調べた結果、姿の形容に関する記述はかなり乏しく、ほとんど人間の姿に現れること、信仰の対象としての「귀신gwisin」、即ち「神系」に属する例はとても少ないこと、主体(正体)別に分けると、「人系」すなわち、人が死んで現れる場合が5分の4を占めていること、「人系」において、いわゆる「怨霊」の場合が過半を越えていること、などが分かったことを指摘した。

このような民俗的・通俗的レベルの「鬼神」の概念は、以下の学問的な領域での鬼神の定義と多少距離があるといえよう。ちなみに、学問上の「鬼神」の概念の場合、その廣い意味において、日本の「妖怪」に当たる韓国語であると提案したことは、今後の比較文学・文化において、充分注意をして頂きたいと思う。

【表1】任東權「鬼神論」による鬼神の分類[1)]

鬼神の分類	細部の内容
自然神	天神、天體神、山神、水神、火神、巖石神、農業神、方位神
動物神	○動物が死後鬼神となる例　○動物が年を取って他の動物と変わる例 ○人に虐待を受けて鬼神となる例　○人の恩恵に報いる例
人神	○寃鬼:無実の罪で死んだ人の霊魂が鬼神となる例　○未命鬼 ○孫閣氏:妙齢の処女鬼神 ○嶺東神:嶺東할머니halmeoni(婆の意味) 慶尚道地方で伝承される鬼神
家宅神	○帝釋:家主の運命を司る神　○성주seongju: 城主、成造、星成主主 ○터주teoju ： 土主宅神 ○竈王:竈を司る神　○守門神:大門を取り締まる神 ○厠神:便所を担当する鬼神 ○家具鬼:古びた家具が鬼神となったもの
疾病神	○마마 손님mama sonnim:病鬼、江南から訪れてきた恐ろしい鬼神
도깨비dokebi	獨脚鬼、魍魎魑魅、虚主などと表記される。『三國遺事』には「鬼衆」とある。

1) 任東權(1975)「鬼神論」『語文論集 第10集』中央大學校國語國文學會

【表2】金泰坤「民間의 鬼神」による鬼神の分類[2)]

惡神系統의 鬼神	人死靈	客鬼,雜鬼, 영산, 喪門, 왕신(處女鬼), 삼태귀신, 몽달귀신, 無嗣神		
	疫神	손님(痘神: 別神, 별상神, 痘疫之神), 牛痘之神		
	其他	도깨비, 精鬼, 厲神(여신), 隨陪神, 호구神		
善神系統의 神	自然神系統의 神	天上神系統	天神系統	天神, 天王神, 天神大監神, 都堂天神, 玉皇天尊神, 三聖神, 三皇神, 三神, 檀君神, 성주神, 宰釋神, 三佛宰釋神,天神大神
			日神系統	日光菩薩神, 日月神, 紫芝堂神
			月神系統	月光菩薩神
			星神系統	七星神, 文昌帝君(文昌星), 星神, 老星神, 老神, 北斗七星神, 日月星君神
		地神系統	地神, 터주神, 터대감神,後土之神, 後土夫人神, 土神, 골매기神, 土地神, 洞神, 洞洞神, 洞境都事神, 主山土地之神, 本鄕神, 土主神, 五土之神, 土城鬼神, 堤防神, 都神, 土主官神, 天帝地土神	
		山神系統	山神, 上山神, 堂山神, 都堂山神, 山대감神, 白山神, 女山神, 할미서낭神, 서낭 夫人神, 都堂할머니神, 主山神, 山川神, 山川將軍神, 山川尊神, 堂山하르범神, 都城後土之神, 花山神, 국수神, 神母神, 聖母神	
		路神系統	路神, 路中之神, 道神, 巨里神, 地垈軍行神, 使臣軍行神	
		水神系統	水神系統	水神, 海神, 水靈神, 물할망神, 井神, 水夫神, 川神, 大川神, 靈山大川神, 靈川澤之神, 水口神, 彌勒神
			龍神系統	神神, 물국龍王神, 四海龍王神, 龍宮宰釋神, 龍宮七星神, 龍宮大神, 龍子神神, 四海龍神夫人神, 龍宮佛師神, 四海龍神大監神, 龍宮夫人神, 龍女夫人神, 天龍神
		火神系統	화덕벼럭장군神, 벼락대신, 火神, 化主神, 火正黎神, 竈王神	
		風神系統	風神, 風雷之神	
		樹木神系統	木神, 수풀神	
		石神系統	石神, 선바우神, 巖石神, 공알바우神	
		方位神系統	五方神將神, 五方將軍神	
		門神系統	門神, 門將大監神, 守門神, 문간使臣神	
		冥府神系統	시王神, 差使神, 사제삼성神, 閻羅大王神, 오구 大王王神, 곽곽선생神	
		動物神系統	馬主大神, 馬堂神, 牢馬之神, 업주神	
		農神系統	五穀之神, 農神, 里稷之神, 田橫神	
		産神系統	삼神, 시준할머니神	
	人神(英雄神)系統의 神	王神系統	王神系統	大王神, 王神, 太祖大王神, 恭愍王神, 뒤주大王神, 강화도령神, 昭烈皇帝神, 天子神
			王女系統神	公圭神, 七公圭神, 바리公圭
			王妃系統神	中殿媽媽神, 姜氏媽媽神, 宋氏夫人神(단
		將軍神系統	將軍神系統	將軍神, 忠烈神, 軍雄神, 양장군神, 洪將軍神, 諸將神, 軍將神, 馬將軍神, 龍將軍神, 關公神, 林慶業將軍神, 崔瑩將軍神, 金庾信將軍神, 得濟濟將軍神, 趙將軍神, 白馬將軍神, 上山趙將軍神, 龍馬將軍神, 將神, 南怡將軍神, 張將軍神, 天下第一將軍神, 地下第一將軍神, 天飛馬將軍神
			將軍夫人·女 系統	將軍夫人神, 최일장군마누라神, 林將軍마누라神, 바리데기神, 비리데기神
		大監神系統	大監神, 使臣神, 孫大監神, 權大監神	
		夫人神 · 각씨神系統	夫人神, 각씨神, 계면각씨神, 애기씨神, 堂아씨神, 內殿神	
		巫組神系統	작도大神, 大神마누라神, 萬神할머니神, 大神, 倡夫神, 김금칠선생神, 大神할머니神	
		佛敎神系統	世尊神, 佛師神, 佛神, 동진보살神, 관세음보살神, 玉天大師神, 무악대사神,	
		道敎系統	神仙神, 仙女神	
		一般人神	祖上神, 양산복神, 궁상이神, 도랑선비神, 치원대神,ㅍ말명神, 盲人神, 醫員先生神, 藥局先生神, 地官先生神, 聖人先生神, 監察神, 相思神紅兒神, 上軍神,	
	其他	걸립神, 不淨神, 가뭉神, 家神, 敬迎神, 六靈神, 時氣尊神, 創建神, 南正重神, 遠邇之神, 唐神, 太歲神, 憲望神, 都神, 塔神		

2) 金泰坤(1976)「民間의 鬼神」『韓國思想의 源泉』 博英社 pp.99-122

【表3】金泰坤 居所による分類[3)]

家神 11種	성주신, 竈王神, 門神, 厠神, 地神, 업神, 삼神, 帝釋神, 祖上神, 王神, 井神	
迴神 138種	洞神, 洞口神, 洞境都事神, 山神, 都山神, 上山神, 白山神, 主山神, 龍神神靈, 山川神, 川神, 山川將軍神, 山川尊神, 名山神, 大川神, 井神, 靈山大川神, 水神, 水凉口神, 水中龍神, 水附神, 龍王神, 海神, 主山土地之神, 堂山土地之神, 天帝地主神, 靈川澤之神, 堂神, 本堂神, 都堂神, 堂山神, 堂山하르범, 馬堂神, 淸凉堂神, 家神, 대감神, 西郎神, 城隍神, 都城隍神, 城隍後土之神, 後土之神, 道神, 土神, 地神, 土地神, 土主神, 閭神, 路神, 路中之神, 里社之神, 里稷之神, 里脯神, 堤防神, 石神, 土城鬼神, 府君神, 上堂府君神, 府君山靈, 都神, 敬迎神, 木神, 火神, 天神, 天龍神, 龍神, 天王神, 別上神, 守護神, 厲神, 厲疫神, 疫病神, 痘疫之神, 牛疫之神, 右靑龍神, 左白虎神, 五方地神, 五方將軍神, 牢馬之神, 遠邇之神, 時氣尊神, 田橫神, 馬主大神, 李公·吳公·趙公, 南正星神, 火正黎神, 孫大監神, 朴大監城隍神, 權大監神, 六靈神, 天皇·地皇·人皇, 創建神, 佛神, 將神, 聖人神, 檀君, 唐神, 帝釋, 地垈軍行神, 使臣軍行神, 老神, 太歲神, 大浦神, 五土之神, 五穀之神, 風雷之神, 無嗣(祀)神, 城珏神, 塔神, 三皇神, 三聖神, 富陸堂神, 紫芝堂神, 化主堂神, 花山神, 老星神, 할미堂神, 靈神堂神, 國師神, 국수神, 수풀堂神, 本鄕神, 巨里堂神, 미륵神, 도깨비神, 精鬼神, 애기씨神, 夫人神, 宋氏夫人神, 崔瑩將軍神, 南怡將軍神, 朴慶業將軍神, 金庾信將軍神, 得濟將軍神, 都大監神, 使臣神, 삼神, 恭愍王神, 뒤주大王神, 골매기神,	
巫神	主 祭 神 73種	地神, 성주神, 七星神, 府君神, 將軍神, 호구별 상神, 倡夫神, 대감神, 서낭神, 山神, 祖上神, 神仙神, 冥府十王神, 치원대神, 양산복神, 忠烈神, 궁상이神, 七公主神, 도랑선비神, 진가장神, 農神, 帝釋神, 星神, 差使神, 不淨神, 山川將軍神, 가뭉神, 佛師神, 삼神, 말명神, 별상神, 姜氏마마神, 龍神, 작도大神, 仙女神, 公主(바리公主)神, 五方將軍神, 大王神, 손님神, (痘神), 上山神, 호구神, 天王神, 王神, 맹인(盲人)神, 바리공주守門將神, 업주神, 계면각시神, 竈王神, 內殿神, 우물神, (井神), 大神마누라神, 걸립神, 堂山神, 軍雄神, 사제삼성神, 바리公主神, 水夫神, 世尊神, 노또오神, (將師神), 골매기神, 門神, 물국 龍王神, 비리데기神, 바리데기神, 大神, 日月神, 각씨神, 애기씨神, 隨陪神
	巫神圖にみる神 115種	도당山神, 도당天神, 諸將神, 火덕벼락장군神, 五方神將神, 洪將軍神, 양장군神, 宋氏부인神, 四海龍神夫人神, 馬將軍神, 長將軍神, 關公神, 四海龍王神, 龍將軍神, 玉皇天尊神, 四溟堂神, 玉天大師神, 七星神, 三佛帝釋神, 龍宮佛師神, 四海龍神대감神, 삼神, 帝釋神, 山神, 神將神, 使臣神, 軍雄神, 서낭神, 서낭夫人神, 月光菩薩神, 日光菩薩神, 뒤주大王神, 盲人神, 별상神, 林將軍神, 將軍神, 바리公主神, 女걸립神, 男걸립神, 十大王神, 미륵神, 龍宮夫人神, 白馬神裝神, 작두神裝神, 최일(최영)장군神, 釋迦如來世尊神, 大神할머니神, 將軍夫人神, 得濟將軍神, 대암별상神, 도당할머니神, 女山神, 檀君神, 강화도령神, 동진보살神, 염라대왕神, 조장군神, 龍女夫人神, 관세음보살神, 최일장군마누라神, 倡夫神, 府君神, 天神대감神, 호구아씨神, 南怡將軍神, 산신령내외분神, 土主官神, 龍宮帝釋神, 龍宮七星神, 山대감神, 만신할머니神, 日月星君神, 무악대사神, 竈王神, 堂아씨神, 天神大神, 소열황제神, 문창제군神, 와룡선생神, 上山趙將軍神, 神將軍神, 天下神將軍神, 정전부인神, 龍宮大神, 곽곽선생 이선풍神, 姜氏마마神, 太祖大王神, 中殿媽媽神, 後土夫人神, 벼락大神, 龍將軍神, 醫員先生神, 地官先生神, 藥局先生神, 김금철선생神, 天下第一將軍神, 龍馬將軍神, 투갑將軍神, 地下第一將軍神, 天飛馬將軍神, 시준할머니神(産神), 삼神, 龍子神, 오구大王神, 水夫神, 水靈神, 中殿神, 相軍神, 寃望神, 紅兒神, 本宮神, 相思神, 監察神, 天子神, 帝釋神
雜鬼 雜神		

「鬼神」は巫俗信仰、儒教、道教、仏教などから取入れられた概念が絡んでいて、その正体を掴めるのはとても難しい。まず、「鬼神」の研究でもっとも注目すべき成果は村山智順の『朝鮮の鬼神』(1929)であろう。同時代の研究として李能和の『朝鮮巫俗考』も大事であるが、村山の著作は、例え植民地という時代状況における統治のための研究という問題点を孕んでいるものの、真っ正面から朝鮮の「鬼神」をテーマとしており、文献調査と膨大な現地の事例を網羅しているからである。戦後の「鬼神」の概念は、多かれ少なかれ受けた植民地時代の研究の影響を可能性が高いと思われる。

村山智順に関する研究は日韓両国の主に民俗学者によって盛んに行われて来た。ところ

3) 韓國巫歌叢書VI『韓國民間信仰研究』, 集文堂, (1983年初版) 1994, pp.234~239

が、その大半は「植民地」の政治的意図と「巫俗」に重きが置かれており、相対的に「鬼神」へ焦点を合わせたアプローチはそれほど多くはなかったようである。普段民間信仰というと、「巫俗信仰」「占ト・予言」「風水・讖緯」に分かれる。儒教・仏教・道教などの既成宗教が入る前の宗教現象を一応「巫教」と名付けてみよう。よく「シャマニズム」といわれる廣い意味での巫教現象は東方アジア一帯にみる共通した原始宗教の現象であった。巫教とは漢字のいう如く、人が神と人間に仲立ち、儀式を通じて福を願い禍を取り去ろうとする原始宗教の現象といえる。儀式の主宰者が巫覡(巫女)であり、巫覡によって崇められたり追放されたりするのが鬼神であるのである。「鬼神」はある意味「巫俗」に附随するものであるから、じ上記の研究動向は当然であるといえば当然である。ところが、他方、「鬼神」は風水など民間信仰全般に関わる性格をも有していて、「巫俗」の枠を越える場合もある。そこで「巫俗」のみから「鬼神」を割り出すのではなく、「巫俗」をも含めたより廣い分野にわたる「鬼神」の研究が今後より盛んになることが望ましいであろう。

本発表では、村山智順の『朝鮮の鬼神』そのものを対象としない。勿論、この著書は前述した通り植民地時代における鬼神の研究の頂点ではある。発表の副題を「村山智順『朝鮮の鬼神』の前史」とした理由は、村山以前の鬼神の関心の流れを確かめないとなぜ1920年代に朝鮮の鬼神が著述されたのか、その意味が浮彫りにならないと思ったからである。

近代に入って日本人の手による朝鮮の「鬼神」と関連する記事を拾ってみると、以下のようである。村山の『朝鮮の鬼神』と現代の鬼神の研究と比較しながらその歴史の変遷を辿ってみたい。

▶ 陸軍參謀局『朝鮮近況紀聞』(陸軍參謀局、1870)

目次

位置、分界、道路、宿驛、家屋、山河、兵制、徵兵、免役、俸給、操錬、賞功、賑恤、軍備、烽燧、兵器火藥、城郭、宮城、邑城鎭城、修繕、砲臺、戰艦、五穀鳥獸其他飲食物、金穀出納、鑛山物產及交易、氣候、人情風俗、學校及ヒ進士及第、國王姓名、官名稱、佛寺及ヒ人民信敎、地理誌、外國人內地行、醫藥、温泉、人才、刑律

「人情風俗」

京畿忠淸全羅慶尙四道ノ人ハ気質寛ニシテ生業拙シ雜役ノ操作及ヒ器械等自ラ寛優ノ形状ヲ為セリ且ツ三民懶惰遊食ノ者多クシテ其業ヲ修ムル者僅ニ十ノ二三ノミ平安咸鏡江原黃海四道ノ人ハ気質強悍ト称ス其耕耘漁樵ノ業ニ至テモ又三南ノ人ニ過ク

凡ソ婦女中人以上ノ者ハ縫積ヲ専トシ執筆ヲ事トセス(後略)

「仏寺及ヒ人民信教」

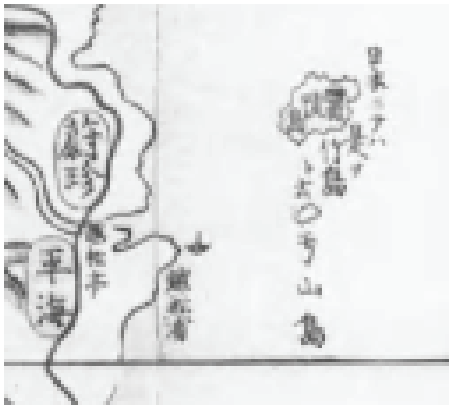
国中神祠ナシ人民祈祷ノ事有るルトキハ即チ清潔ナル山岳ニ登リ精飯精酒ヲ奠献シ祝辞ヲ以テ其事由ヲ告ク

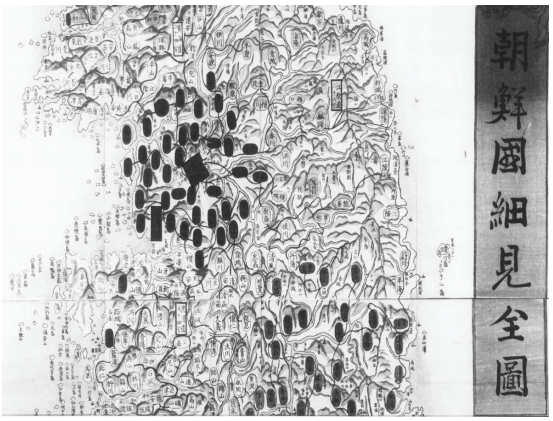
仏閣ハ皆名山ノ下大川ノ辺ニ在リテ之ヲ市街ニ築カス其廣狹大小ハ概日本仏閣ノ如シ大刹ニ至ツテハ僧七八百名ヲ留メ日本ノ仏閣ニ勝ル者アリ而テ其堂宇皆宏敞ナラサルナシ人民皆儒教ヲ尚ヒ仏教ヲ信スル者鮮シ

「医薬」

医薬ノ法清国ト異ナルナシ

▶ **染崎延房 編『朝鮮國細見全圖』 (出雲寺萬次郎, 1873)**





▶ **染崎延房 編 『朝鮮事情上・下』(丁子屋忠七等, 1874)**

目次 歴世、朝儀 附京俗政令、道里ノ一 附 戸数田禄、道里ノ二、節序、服色 附手道具、「人物」

男ハ京畿道黄海道忠清道全羅道慶尚道ノ人物善シト云フ然レドモ性質寛優ナルガ故ニ柔軟ノ者多ク生業モ自カラ鈍シ農工商トモニ十人之内二人ハ働ケドモ八人迄ハ少シの用事アレバ只其一事ニテ其日ヲ暮ス

多様な人物の群像に述べる中、特に迷信、巫覡、衛生に関する記述見つからない。

▶ **佐田白茅『朝鮮聞見録』(玉山堂, 1875.10)**

目次: 上巻 交際、冠、婚、喪、祭 下巻 朝鮮略図、武備、刑罰、山川、戸籍、儲畜、欽承、官制

「喪」

○ 膳部三ツノ内一膳ハ死ヲ迎えタル鬼神ニ奠へ、一膳ハ死人ヲ導キタル鬼神ニ奠へ、一膳は戸ニ奠ト云、(p.13)

○ 風水ト唱テ、土地ヲ視察スル事ヲ、甚タ重ジ方角ヲル者、處々ヲ吟味イタシ、山ノ形チ、水ノ流レ、岩ノ形チ、死者ノ年シ、生日等ニ応じシタル、土地ヲ能々看定スト云、之ニ依テ方

角ヲ見ル者ニ、衣食ヲ与ヘ、諸事手厚ク、遇スルヨシ、(p.15)

○葬リ所ヨロシキ時ハ、子孫繁昌シテ、富貴ニナル、若シ悪シキ所ニ葬ル時は、子孫ニ祟ルト唱フルヨシ、(p.15)、

「祭」

○大祀ヲ執行スル所ハ、社稷ノ祭壇ニテ、京城ノ内ニアリ、社ハ后土ヲ本トシ、東方ニアリ、稷ハ后稷ヲ本トシ、西にアリ仲春仲秋臘日ノ三度ニ祭ルヨシ(後略)(p.18)

○中祀ハ風雨水旱ヲ祈ル、壇ハ京城外ノ南ニアリ、又神農氏西陵氏ヲ季春ニ祭ルヨシ(p.18)

○小祀ハ霊星ヲ祭ル、壇ハ京城ノ南ニアリ、立秋後ノ辰ノ日祭ルヨシ、(p.18)

○老人星秋分　馬祖仲春　先牧仲夏馬社仲秋馬步仲冬此他纛庙厲廟ナトノ祭リ、数多有リ、幣用ノ品ハ、籩豆四夕尊実ニ牲少牢、鬼神ヘ飯一ツ羹一ツ、羊豕槃一ツ、(p.18)

○纛庙ト云ハ四方ノ鬼神ヲ集タル祭ノヨシ、(p.18)

○厲壇ト云うハ、京城十里外ニ在リ、無縁ノ者ヲ葬リタル所ナリ、春秋ニ祭ヲ行フヨシ、(p.18)

○宗廟ハ京城ノ内ニアリ、東太室南ニ向フ、庭ノ東西ニ各廟アリ、西ニ神主ヲ祀リ、東ニ功臣ノ神主ヲ祈ル、凡祈ル日ハ、四孟上旬及臘月ノヨシ、(pp.18−19)

○国ノ大事ハ社稷宗廟ヲ祈リ、其外嶽海名山大川ヲ祈リ、風雷雨水旱悪病蝗虫戦伐等ノ事アレバ、其神ヲ祈ルト云、(p.19)

○啓聖祠ハ、文宣王ヲ云廟ハ京城ノ内北ニアリ、大成殿ト云(p.19)

○關王庙ニアリ、崇禮門ノ外ニ一ツ　興仁門ノ外ニ一ツ　宣武祠ト云祀日アリ季春　季秋(p.19)

○關羽大將ヲ四節ニ祭リ、京中ハ勿論ナリ、各道處々ニ祭ル、中ニ霊ナルハ、全羅道全州ノ關公ノヨシ、大道ノ傍ニ堂アリ、旅人ハ銭ヲ投げシ拝ヲナス、(p.19)

○京中ノ關王ノ庙ヘハ、終日人ノ絶間ナク、或ハ子ナキ者ノ齋戒ヲイタシ、祈誓ヲナシ、又ハ身ノ大事大望ノ事ヲモ、祈祷スト云(p.19)

○祭禮ノ式社稷宗廟ニハ国王躬親ラ、之ヲ行テ、香ヲ焚トテ四拝ス、宰相初メ供物ヲ捧ゲ楽舞ヲ奏シ、祭文ヲ誦スルヨシ、(p.19)

○諸道州郡ノ水旱ノ祈リ、郡守縣令自ラ行フヨシ、(p.20)

○諸州府ヘモ、城外ニ壇有リ、城隍ヲ祭ト云一年ニ三度ツヽノヨシ、(p.20)

○宋氏婦人ノ祭アリ、正月十五日壇ニ於テ祭文ヲ唱ヘ奠物ヲ壇上ニテ焼弃ツ、(p.20)

○士庶人病ヲ祈ル時ハ、水濱ニ壇ヲ設テ、巫女ヲ頼ミ牛豕魚肉ヲ備ヘ、木棉又ハ紙類ヲ奠シテ祈ル、巫女其人ノ衣類ヲ芋ニ結ヒ四方ヲ招キ、又其着物ヲ打擲シテ其罪ヲコラシムル体ヲナシ、又錚ヲ鳴シ、種々ノ事ヲ語リ、天ヲ祈リ類紙等ヲ、燃シ或ハ口ニ大ナル金ナ椽ヲクハヘ、濁酒ヲ濺キ、活タル鶏ヲ呼ビ是ヲ呑マセ、椽ヲ口ニツギ、手ヲ放シ、其場ヲ、ハセ廻リ、狂人ノ如クニテ、肉汁ヲ投ゲ、始終言語絶間ナシト云、(p.20)

○雨ヲ祈リ、漁ヲ祷ル時ハ、一邑一村集リ、其地ノ名山海濱ニ於テ祈ルト云(p.20)

○五輪ノ中ニ、重病ヲウクル時ハ、夜半ニ五七度数ヲ定メ、冷水ヲ以テ、身ヲスヽギ、星ヲ祈ル、精神ヲ懲シ、自ラ祈ル有リ、(p.20)

○船ノ祭ハ、船頭自信ニ祭リ酒肉ヲ奠ズト云(p.21)

○送神ト云事アリ、痘瘡神ヲ送ル事ニテヤクヲ終レバ、親類ハ勿論、近隣ソノ外、親旧ノ者ヲ呼ビ、盛宴ヲ張リ、痘瘡神ニ、親ク膳部ヲソナヘ藁ニテ馬ヲ二三尺ニ作リ膳部ノ品ヲ負セ、野路ヘ捨ルト云、又痘瘡人ノ門ニハ、縄ヲハリ、青松葉ヲ挾ミ、用事有之者ハ、外ヨリ案内ヲ乞テ、其家ノ者ヲ喚出ン(ママ)、通用イタスヨシ、痘瘡神ハ、男女老小共ニ穢ヲ忌ト云、(p.21)

「雑誌」

○関門左右ノ柱ヘ題辞アリ、風霆駕海虎豹守關ト、大書セリ、又漁民ノ木戸ヘ、種々ノ題語詩句ヲ表札ノ如クシテ、張付ケリ、間ニハ、戸ノ左ヘ、堯之日月、右ヘ舜之乾坤ト題セリ、(pp.25−26)

○虎ノ畏レルハ、夜分ニ水ヲ畏ルヽニヨリ、夜道ハ炬松ヲ絶サズト云、(中略)又其年ノ気候ニテ、余計ニ出る事有リ、其年ハ必ズ、悪病流行スルカ、又ハ凶年カト、老人ナド申伝るヨシ、(pp.28−29)

○山伏ト云者ハ、無ケレバ、道士ト云者アリ、大概山伏ニ似寄タルヨシ、又巫男巫女ノ類アリ、(p.29)

○小見ト云者アリ、盲人ノ事ニテ、専ラ占筮ヲ為シテ、世ヲ渡ルヨシ、(p.30)

▶瀬脇寿人, 林深造 編『鷄林事略. 初編1』(吉田清兵衛, 1876)

目次　巻之一　全国の位置、島嶼、山川、気候、地味、産物、国郡都城、宿駅道路橋梁、政綱、文学、風俗、貨幣、度量衡、量田、里程

巻之二 兵制、試取、兵船、城堡、軍器軍装、警急、烽燧、錬兵、侍衛入直行巡、符信、兵藉、免役、救恤給休、留防、褒貶、軍刑、駅馬厩牧

「風俗」

土俗深く鬼神の説を信ず。火災あれば之を土霊の祟といひ、水災あれば之を水神の祟といひ。又虎に害せらるる者、年々幾百人をることを知らず。之を縁数なりといひ、皆鬼神の使むる所と■すなり。(p.38)

▶シャーレル・ダレ(Dallet, Charles、1829−1878)著　ポンペ (Pompe van Meerdervoort, 1829−1908) 抄訳　榎本武揚(1836−1908)重訳 『朝鮮事情 ： 原名・高麗史略』(丸屋善七　1876.9)**(集成館 1882.8)**

第十一篇 教法 教徒等

高麗人ハ元来上帝ヲ信スル心ナク唯孔子ノ教ヲ遵奉シ其他ノ教ニハ甚タ意ヲ注カズ、此国ニ軽信者多キハ論ヲ俟タズ、彼レ鬼ヲ信シ日ノ吉凶及前兆ヲ信シ不時ノ災ニ逢フ時ハ風神、火神、山神等ヲ祈祷ス蛇ハ霊虫ナリトテ殺サズ、室内ニ決シテ火ヲ断ル事無シ其火滅スル事アル時ハ以テ凶兆ト為ス

病ニ罹ルモノアル時ハ屢々病者ノ頭ヲ洗ヒ机上ニ果実ヲ積テ之ヲ戸前ニ置ク家人病ニ罹ルモノアル時ハ戸前ニ小旗ヲ掲ケ或ハ緊シク其戸ヲ閉ツ病者ノ家ニハ病神ヲ祷り盛膳ヲ具シテ之ヲ尊待ス、コレ其病ノ神ノ怒リニ触ン事ヲ恐レテナリ此類ノ風習尚甚ク多ク或ハコレヨリ甚シキモノアリト雖モ彼レ常ニ信シテ必ズ之ヲ行フ

盲人ハ吉凶ヲ前知スルノ職ヲナシテ一ノ社ヲ結ヘリ而シテ彼等ハ昼夜トモ鑑札ナクシテ市街ヲ歩行スルヲ得、彼等亦逐鬼祭ヲ行フ高麗人皆厚ク之ヲ信ス

▶ **根村熊五郎『朝鮮近情』(兎屋, 1882)**

目次　政体、王家、附大院君の履歴、地方政制、兵制、法律、租税、宗教、国人の種族、人を挙るの法、国勢沿革史、地理、気候、人民の気風及び風俗、政党

「宗教」

朝鮮の宗教は儒仏最も盛なり凡そ国中三尺童子といへども孔子

尊きを知らざるものなし仏教も支那より入来り漸く全国に汎布すといへども大抵賤民の間にのみ行はれ上流の士君子にはこれを信するものなし(中略)

朝鮮にて奉する孔子教は五輪を守るべきの外に敬天の一主義を加へたるものなり故に旱魃洪水等に際しては獣畜を屠りこれを供して神に祷るを常とす此式は地方長官先づこれを行ひ其効なきときは大臣これを行ひ尚ほ其効なきときは終に国王親らこれを行ふ地方長官天に祷りて効ある時は賞を蒙るといへども若し効なきときは其譴責を免れず或は其官職を遞はるゝに至る又家人病に罹るときは必ず物を供して神に祷る其他日の吉凶及び前兆等を畏れ室内に決して火を断つことなし其火若し滅するときは以て凶兆となし眠食を安せずといふ(pp.28−31)

鈴木信仁『朝鮮紀聞』(愛善社、1885)

目次 歴世、王室、儀式、事大、地理 附地方官、京俗駅路、節序、人物 附僧道

官制 附科挙儀仗、風俗 附冠婚喪祭、戸籍 附儲蓄田禄、文芸 附技術、武備、刑罰、度量、服色、飲食、第宅、物産、禽獣、農圃、雑聞

「風俗　附冠婚喪祭」の内容は佐田白茅『朝鮮聞見録』(玉山堂, 1875.10)を書承

▶本間久介『朝鮮雑記』(春祥堂、1894)

・「十里標」一長承(p.30)

・「女医」(p.30)

・「墓地」(p.72)

・「天災」

旱魃、水害などの天災打続く時は、村民隊を編みて高山の頂上に登り、草木を焚き天に祈る、若し天災猶止まずんば、縣、郡、府、牧の長官犠牲を供えて神に祷る、犠牲には多く、豚若しくは羊肉を用ふ、又疫病流行する時の如きは、盛なる儀式を設け大に犠牲を捧ぐ、(p.100)

・「市街の不潔」

不潔は朝鮮の「バテント」なるべし、京城は更にもいはず、八道到る処として、市街らしき市街を見ること能はず、牛馬人糞は市中に溢れ、其不潔なることいふべきやうもなし、(中略)植物の不潔なるは、また此の邦の特色ともいふべきものにして、腐敗たる魚菜を用ゐるはいはずもがな(p.111)

・「便所」

尿は穢きものと知れず、彼ノ邦人は之を湯、或は水の如くに心得て穢しとも思はざるは、亦彼の邦人の、不潔なる人種なりといふ一の例証となすに足らん、(p.133)

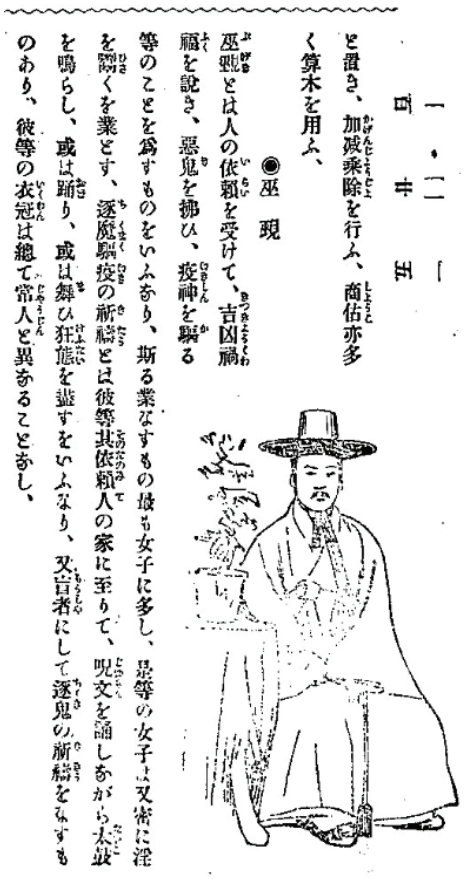
「宗教」

李朝高麗に代って、八道を支配するに及んで、斥佛尚儒の方針を採りしかば、国内歴然として儒に帰し、仏を信ずるものをば愚婦愚夫と罵るに至れり、(中略)朱子以外に一機軸を出したるものなく、又朱子以外に英傑の儒者ありしことを知れるものなし、故に冠婚葬祭の制式に至るまで、皆唯其の制を尚用し、我国は儒教国なりと、傲然として人に誇るに過ぎず、その尚ふ所は儒教なるべしと雖も、唯其表相虚礼を事として、実体道徳の源を求むることなし、(中略)彼の邦の宗教は既に此の如し、無宗教国なりといふも、豈に其れ誣言ならんや(pp.119−123)

「彼国ニ於ける吾国僧侶」(p.124)

「寺院」(p.126)

「通度寺」(p.128)



一・一一　一百　廿　五

と置き、加減乗除を行ふ、商估亦多く算木を用ふ、

◉巫　覡

巫覡とは人の依頼を受けて、吉凶禍福を說き、惡鬼を拂ひ、疫神を驅る等のことを爲すものをいふあり、斯る業なすもの最も女子に多し、是等の女子は又密に淫を鬻くを業とす、逐魔驅疫の祈禱とは彼等其依頼人の家に至りて、呪文を誦しながら太鼓を鳴らし、或は踊り、或は舞ひ狂態を盡すをいふなり、又盲者にして逐鬼の祈禱をなすものあり、彼等の衣冠は總て常人と異なることなし、

▸清水橘郎 著『朝鮮事情鶏の腸』(梅原出張店 1894)

目次　・　歴世、地理、王室、政治、風俗、交通、動植物、雑聞

「風俗」

〇覡の妄誕

覡(みこ)は幼年の者死するとき其魂魄を奪ふの術ありと稱し占考(うらなひ)をなし又託宣などを唱ふ婦女は多く之に惑はさるゝといふ

▸矢津昌永『朝鮮西伯利紀行』(丸善、1894),

「酒の製法を見て嘔気胸を衝く」(p.44) 「朝鮮人の不潔驚くに堪へたり」(p.45)

▸荒川五郎著『最新朝鮮事情』清水書店 1906・5

衆議院議員荒川五郎(1865−1944)による朝鮮事情紹介。日韓合邦直前の大韓帝国時代の朝鮮に渡って残した風俗習慣から産業までありとあらゆる方面にわたる詳細なレポート。

「朝鮮の宗教」

◎朝鮮は多神教の国で、歴史以前から天地日月、星辰、山川や鬼神などを祭ったり、また猛虎を拝するなど行はれて、未来よりも返て現世の禍福吉凶疾病等を祷ったり占ふたりするのを主として居る有様である。

◎儒教が盛になり、また仏教が入って来てからは、其信向(ママ)者も殖えて来たけれども、併し現世的の多神教は一般を支配して、之を司とって居るのは巫女と占者とである。

◎其鬼神の主なるものを掲げて見れば

城主、上梁に住んで家を守る神

業位様、幸福をつかさどる神

廚王、廚に住で飲食をつかさどる神

基主、宅地一般を司どる神で俗にトチユーと云ふ

以上は家について居る神である。

◎又山林に属する神は

山神、山を司どる神

城隍、石を好む神

◎疾病に関する山(かみ)

疫疾、俗にマヽと称へ疱瘡の神

添疾、俗にインビョンと云ふ疫疾の神

瘧疾, 間歇(おこり)熱の神

虎鬼、霊仙、皆疾病の神

◎其他人類に属する雑神は

童子菩薩、人の両肩を司どる神

寃鬼、怨恨を懐き人を悩ます鬼

未命、其性質 貪饕なる浮行の鬼

天下将軍、俗チヤンスンとて路辺に立つ

魑魅魍魎、ドクカビーと称ふ

◎此等の祠堂は山の上や又は村外れにあって、一般人民は之を信仰すると福を授かり又不幸事や疾病災害などを救ふて貰はれると思ふて居るので、之を司どる巫女は鬼神に關羽や古の帝王を説きまぜて色々の事を言ひ触らし、以て人民の尊敬を受けて居るのである。

◎巫女が祠堂で祈祷をしたり未来の予言したりなどする時は悲痛なる音楽を用ゐて、あやしき文句を訴へるかの如く、狂するが如く、又泣くが如く、嫋々媚々として之を唱へ、聴く者をして感激に堪へざらしめ、以て大に有りがたがらするのである。

※つづいて、仏教に関しては太宗王の仏教抑壓の方針のため、僧侶は「仏教の神髄である来世の事に重きを置かず、衆生を濟度」せず、結局寺院は「只家内安全子孫繁盛息災延命の祈禱所」と堕落してしまったという。後につづく、東本願寺・日蓮宗・浄土宗智恩院派・奥村五百子などによる朝鮮内の布教の現況を述べる。

「朝鮮人の迷信」(p.122, コマ番号73)

◎文化の開けない人民が迷信の深いのは一般の有様で、それが為めに窘められ害せられて、その進歩発達を妨げられることは決して少なくない、朝鮮人も其一つである。

◎朝鮮人は病気とかその他吉凶禍福の事など多くは皆迷信に支配せられ、医薬より祈祷、勉強よりも祈願、戒慎よりも呪詛(まじない)といふ有様で、為めに身を戕なひ身代を失ひ困難に陥るものはドレだけか分からない。

◎病気に罹ると大抵死霊生霊、その他狐などの憑附物の為めに、其祟りで此やうになるのであるからと云ふて、巫女を招いて祈祷をして貰ふ者が多い、巫女の外に、男子で修験者のやうなものも居る。

(中略)

◎此の巫女といふのは、所々の関帝廟や城隍廟、其他色々訳も分らぬ神社淫祀の社などに居て、人の気をはかり不幸に乗じて巧みに弱みにつけ入り、種々出鱈目の事を並べて祈り祈祷をするので、日本の梓巫に似て居る。

「朝鮮の医薬」

◎朝鮮では医薬の道が極旧式且幼稚であるし、又人民も蒙昧で殊に前に述べたやうに迷信が深いから田舎になると祈祷や呪詛(まじない)に依頼して薬を用ゐるものは少く、殊に医者にかゝり治療を受くるなど甚だ稀である、中には薬の効能を知って居っても、価が高いものであるから、ツイ近所の怪しい修験者や巫女を頼んで祈祷などで済まそうとする風がある。

「朝鮮の風俗」

◎以上朝鮮の人、朝鮮の衣食住、朝鮮の婚姻、迷信、交際など朝鮮の風俗は大抵説いたが、尚其余の事や、又この後改良せねばならぬ重なることなど、茲に一節を説かう。

◎朝鮮の社会は上等と下等とあるのみで中等社会は無いが、下等社会では家庭も教育も殆ど無いので小児でも大抵は裸体のまゝで、別に衛生などの事も更に無く打ちころがしの有様であるから

▸薄田斬雲『暗黒なる朝鮮』(日韓書房、京城、1908.10)『朝鮮漫畵』(日韓書房,1909.1)

序

一　本書は、韓国の暗黒面として予告したのを呼びにくいから、暗黒なる朝鮮と改題した。

一　本書は、朝鮮の暗黒面に向つてマツチ一本を摺付けたに過ぎない。若し夫れ炬火を投ずべ〈んば、此書記載の各項目がが各千頁の大冊を要するであらう。併し、暗黙な温突にはマツチ一本の閃光も無きに優る事万々であらう。炬火を投ずるに十数年の準備を要する。

一　此書は著者か編者か分らない。他人の記録から抜抄した個所もあるだらう、材料蒐集上巳むを得ぬ次第、お断りをして置く。 明治四十一年九月京城旭町に於て　斬　雲　誌

	암흑의 조선	조선 만화		암흑의 조선	조선 만화		암흑의 조선	조선 만화
한국인의 종교와 민속신앙	무녀	승려	주		온돌의 독거	신분 사회	양반의 생활	대신행렬
	요괴귀신	용신제			조선집의 부엌		한인의 생활	궁중
	포창신	조선의 인왕님			변기 씻기			거지
	무녀	매복선생			변기와 세면기			옛 조선관리
	병사자의기도		오락문화		옛날 악기	기타	소 밑에서의 낮잠	여보의 품질
	수험자				연날리기		조선인의 신문사	주전의 감정
	월식				조선의 장기		시골여행	신문의 낭독
	길흉판단				제기찬다		한인과의 교제	족집게
	전변지이				돈먼지기			조선의 가계간판
의		여보의 주머니			무동			
		한인의 우비			투석전			
		유방노출			조선의 연극			
		조선의 모자	기생	기생	하이칼라 기생			
		여인풍속			기생의 춤			
		조선신사			갈보집			
식		우도			단단해졌어요			
		신선로	통과의례와 세시풍속	한인의 결혼	묘 앞의 통곡			
		엿장수		중답품	묘 주위의 석상			
		가게앞의 소머리		묘소				
		한인의 딱치기		조선의 장례식				
		우동집	조선의 의료	조선의 의사				
		군밤	이동수단	한인가의 인력거꾼	옛날 대선			
		딱장수			옛날 한선			
		쌀씻기			조선말			
		참외			조선의 가마			
		조선의 음식점			조선 자부			

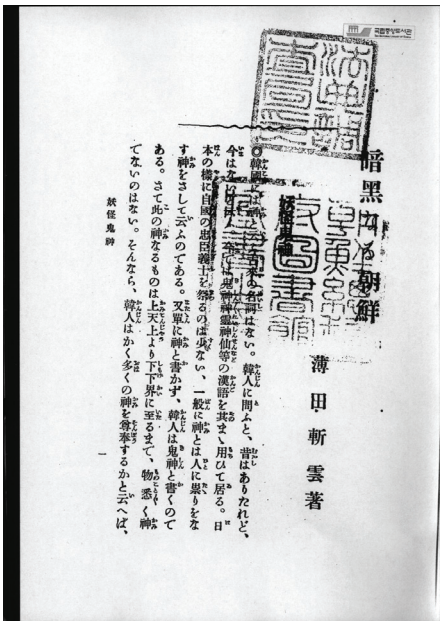


図4　拙論「舊韓末在朝日本人作家，薄田斬雲の朝鮮見聞記に関する考察一妓生関連記述を中心に一」より

妖怪鬼神

韓国には神と云ふ古来の名詞はない。韓人に問ふと、昔はありたれど、今はないと云ふ。今では鬼神神靈神仙などの漢語を其まゝ用ひて居る。日本の様に自国の忠臣義士を祭るのは少ない、一般に神とは人に祟りをなす神をさして云ふのである。又単に神と書かず、韓人は鬼神と書くのである。さて此の神なるものは上天上より下下界に至るまで、物悉く神でないものはない。そんなら、韓人はかく多くの神を尊奉するかと云へば決してそうではない。唯存在を信ぜられたのみで、現今韓人間に崇拝さるゝものはあまり無い。

◎そんなら韓人を精神的に支配する宗教の力を持って居るのは何かと云ふに、それにクイシンと云ふのがある、鬼神(きじん)と云ふことだ。(pp.1−2)

(一) 鬼神

◎韓人は、死後何うなるかと問ふと、霊魂になると云ふ。之は我々の云ふ魂に当る。処で、此の魂は、埋葬された墓所の棺桶の中に順しく静として居る。命日には各自の家へ来て供物を受ける。何時迄も墓所の内に居る。我々の様に地獄へ行くの極楽へ行くのと云ふ事はない。

◎だから、朝鮮人は地獄極楽と云ふ事知らない。

◎已に地獄極楽と云ふ事はないから、仏様と云ふ事も無い。従って寺院の必要は無いのだ。(中略)

◎人間は皆な平和な死を遂げぬ。死際には、誰しも病体になるが、癲病などか精神病だとか

の業病を患って死んだものは、墓中に安眠して居ない。又、溺死、憤死、刃傷、自害、首縊り其他山へでも行って死んだと云ふ、所謂變死を遂げた者などは、浮ばれぬ亡者となる。此の亡者は、墓地安眠せずして、大自在力を得て鬼神(クイシン)となって、至る処飛行して火靈水靈などになる。此の鬼神(クイシン)は韓民間に於ける唯一の神仏で、人間の運命禍福を司る。

◎一方、釈迦の方は何うかと云ふに、四月八日には、韓民男女盛んに出て市中を徘徊するが、唯だ無意味に釈尊降誕生祭といフ名称を利用して、一日の遊楽を求むる有様だ。仏教は韓民の宗教になって居ない。(中略)

◎そんなら、韓民一般の信仰して居る鬼神(クイシン)とは何んなものか、何んな姿をして、何んな事をするかと云ふに、之は普通韓人と同じ白い着物を纏ひ、手も足もある、完全な普通人と何んの異る所は無い神様で、夜になると出る、彼等は室内にも住む、石垣の穴にも住む、朽ち木の空洞にも住む、何うでも小暗い穴の中に住むので、夜は魔力を逞ふして、折々暗中に白衣の姿を現はす事がある。人間の吉凶禍福は一つに此の鬼神(クイシン)の力に依るのだ、処が鬼神(クイシン)にも悪性のがあって人を苦しめる事もある。殊に悪性なのは一生寡婦で終った女の鬼神(クイシン)で空閨の淋みしさを怨んだ一念は、死んで後、人間に祟るのだと、そこで其祟りを防がん為めに、寡婦が死ぬと、その霊が生きて娑婆に出て来ない様に封じをする。その方法は、蕎麦餅を製へて、夫で以て死体の耳鼻口目其他の腔を皆んな封じて了ふ(中略)猶恐ろしいのは未婚の少女の霊で、已に色気が付いたものが、男の情を知らずに夭死すると、此の怨みは恐ろしく祟る。為めに一家内の者盡く業病に罹って痩せて皮ばかりになる事があると言ひ伝へられる。

※つづいて、憤死した鬼神(クイシン)の祟り、溺死した鬼神(クイシン)の祟りが記述され、「だから、鬼神(クイシン)は何よりも恐いものだ、韓人は鬼神(クイシン)に対して出来る丈け御機嫌を取る、そして禍を買はずに福を授けて貰はふと苦心するのだ」と締め括られる(pp.5−7)

(二)魑魅魍魎(ヒャッカビ)

◎鬼神(クイシン)の方は吉凶禍福共に司る妖怪(ばけもの)であるから、善人に対しては余り悪戯をしない。畏敬して己れの道を守って居れば大して恐るゝ事は無いのであるが、此に正真正銘の悪魔がある。之をヒャッカビと名ける。ヒャッカビは魑魅魍魎[4]とも書すべきであろう。

4) 魑魅とは山林の異気からできた化物で江戸時代の百科事典『和漢三才図会』では、山の神として登場する。一方、魍魎は『和漢三才図会』では水の神として紹介されている。一般的に魑魅魍魎とは山と川のすべての妖怪の意味

◎ヒャッカビは何処から来るかと云ふに、之は余程奇怪に迷信されたもので、人間の血から生ずる。(後略)

(三) 濁脚(トツケビ)

◎ヒャッカビと同じ様のもので、濁脚(トツケビ)と云ふのがある。濁脚(トツケビ)は箒へ付いた血から出る。(中略)此の濁脚(トツケビ)は、金を幾らでも持って来て呉れると言ひ傳へられる。(中略)可笑しい事には、前のヒャッカビも濁脚(トツケビ)も皆な金姓の者で金書房(きんサバン)だと云ふ。朝鮮の魑魅魍魎(ばけもの)は凡て金書房(きんサバン)と定まって居るのだろう。(pp.10−11)

◎右の外、韓人の物識(ものしり)が語る神様は無数である。左に其の概略を述べて見やう。

・玉皇上帝一俗に「ハナニム」と云ひ、春秋秋冬四時の不変を主宰する神で、いつも天宮にあって諸神の王である。

・山神一韓国では、墓を山所と云ひ、墓を山神の守護する処であるからと云ふて、墓に祭をする前に、必ず山神の祭をする。(後略)

・五方將軍一方位を守護する神で、韓人は東西南北中央を五方と云ひ五方将軍とは、青帝、白帝、赤帝、黒帝、黄帝、の五将軍である。(中略)尚覡(みこ)の家では五方將軍を祭っておる。

・神將一五方將軍の大将で、其数は非常に多く、悪魔降伏の神であると云ふので、此の神も覡(みこ)が祈願をなす神である。(pp.11−12)

※以後、龍神、城隍、府君堂、指道長承、乞粒、業位様、産神、成主、七星堂、思悼世子、國師堂、崔瑩將軍、末命、老人堂、戸口別星、基主、厨王、厠神、三佛、關公、太上老君、タイジュ(태주)、ソンカクシ(손각시)と続く。

※薄田の分類は、現在の鬼神の分類と比較すると、「人死霊」「ドケビ」「神」と三つに分けていることが分かる。

巫女

◎朝鮮の巫女(みこ)をムーダンと云ふ。此の巫女は国家の命を制する大權能者の如く見られて居る。伊勢の神風を祷ると言った具合に、国家事あるの際宮中には、巫女を王城内に招いて祈祷をさせる。(後略)

で使われている。

◎近頃では、我が衛兵警官の警戒を厳重にして、巫女を宮中に入れさせない、(後略)

◎以前は宮中に出入する巫女が、非常の権力を有して、神と人間との仲介者として羅馬法王式に豪い威力を持っていた者だ。今の統監府後の南山の頂に在る国師堂の祭主は斯種の巫女であって(後略)

◎そこで、巫女の祈祷とは何んな事をするのかと云ふに、巫女は天神地祇に対して此願を叶へて呉れと祈るのだから、室には祭壇を設けて人も神とも付かぬ怪しげな木像を飾って置く。その他、關羽やら孔子やらの画像の掛軸を四方の壁に隙間もなく懸ける。詰り之等は皆天神地祇と見立たのであらう。

◎国家の大事に対する祈祷のやり方だ。次に一般人民の為めに病魔を除くなどの場合には(中略)

◎巫女自信は霊魂の仲介者で、従って凡ての神祇霊魂と友達であるから、自分の望む通りに神祇其他妖魔共を左右する事が出来ると云ふて居る。

◎巫女の祈祷は十種から有る。其中に一番多く行はるゝのは、病気の霊魂(たましい)を追払ふ事である。だが、種々の霊魂が何ぜ人間に取り付いて疾病の苦を嘗めさせるかと云ふに、先づ餓へて居る霊魂がある、是奴が人の家の戸口辺に彷徨うて来る。其時盛んに御馳走を食って居る男があって、此の男が、肉の一片なりと投げてやったら安全だが、影も形もない霊魂の居るとは気の付く筈も無く、自分ばかり美味そうに食ふて居ると、霊魂は恨骨髄に徹して其男に取り憑く

◎若し二人の親友があったとする。一人が死ぬ、死んだ霊は、其の親友をも黄泉の旅仲間としやうとする。之が為めに親友は病の床に就く。

◎若し、人あって是等の霊を悪口し、皆んな撲滅しやうなどゝ言って霊魂の恨みを買ふと、頭痛病に罹ゝる。

※以後、「病死者の祈祷」「疱瘡神様」「龍神祭」「修験者」などの内容が続く。

田舎旅行

・我が内地ならば、村外には、必ず鎮守様がある。鎮守の杜がなく、猿田彦大神とか、二十三夜塔とか云ふ種類のものが無くば、田園も村落も全く無趣味であるべき所へ、況んや各戸裏庭なく、樹木ないと来て、腐れ掛つた藁屋根がギッシリ並んで居るのだから、何の風致もない。唯だ、町外れに時としては六尺ばかりの木へ男の顔と女の顔を描いたのが立てられて、それへ、地下大将軍、地下女将軍と書き付けられて居る事がある。之が村人の神様として畏敬する御本尊であるとは安上りだ。……田舎でも一郷必ず有徳の君子人と云ふべき学者有る。彼等は孔孟の教を奉じ論語孟子の仁義孝悌を普く一郷人に説き聞かせ、一村の道徳は全く儒教で支配されて居る。そして宗教めいた事になると、関帝廟も仏寺もあるのでなく、唯だ死霊、生霊、鬼神を恐るゝばかりだ。そして、文明の新知識は無いから大勢は解らない。すべて排日

思想を抱く。日本人が多く朝鮮に入り、朝鮮の土地を占領買収して了ふ。……田舎の旅行も、四五年前は呑気であつた。今では、田舎の者迄も一般に排日思想にかぶれて日本人だと云ふと、直ぐ猜忌疑の目を向ける。非常に質が悪い。

※以後、**朝鮮叢話:**(一)國王たるの相　(二)オタマジヤクジ時代を忘れるな　(三)出世乞食 (四) 東大内と水標橋 (五) 兎の頓智 (六) 章魚入道 (七) 不死の僧…(廿六)馬盗人など説話、逸話がつづく。

▶ **高橋享『朝鮮の物結集　附俚諺』(日韓書房、1910.9)**

序

韓国の現状を調査して、我が中古史の半面と比較せんが為に、昨年の冬、韓国に出張しつる時、多くの人に会見して、様々の事どもを見聞しけるが、其国の俗間に傳はれる説話又は裡諺に関しては、文学士高橋亨君に益を得たる所多かりき。

高橋君は、我が東京帝国大学文科大学漢学科の出身にして、久しく韓京に在り、彼地の高等学校の学監として、数多の韓人子弟を教育し善く韓語に通じ、其国情に熟せり。其監理せる学校の子弟は、諸方より来り学ぶものをるが故に、従つて広く各地の俗話俚諺を調査するの便あり。(中略)

本書はこれらの俗伝諺語を蒐輯せるのみならず、又其事実の解し難きものには解説をも付し、批評をも加へたれば、読む者をして善〈民情を知り国俗を辨へしむるに便なり、書中に挿める上中流の紳士の家屋の挿圖の如きは、高橋君が余の嘱を納れて特に調査せられしものなり。凡かくの如き類は、高橋君の如き、韓語に通じ其国情に熟したる人にして始めて能くする所ならん。

されば余は本書によりて、歴史上より日韓古今の比較を為すに便利を得たるを感謝するのみならず、更に広く一般の文学に携はる人士に薦めて、諸方面より日韓文野の異同を比較すべき材料にも備へたらんには必幾多の発明あるべきを信ず、豈たゞ一部の御伽譚として娯楽的の読本に供すべきものならんや。

明治四十三年八月

萩野由之識す

自序

……歴史伝記が過去を語りて而して其の中に隠さゞる時代精神と理想の一音響を傳ふる。其他旧習慣好尚の其々其時代に於ける重要なる意味を教ふる等、皆何れも其の中に社会生活の流れの停回して作成せる沈澱物を含有ナるものなり。彼の物語及俚諺の研究が社会学

的価値あるは亦た実に此に在りて存す。蓋し俚諺は社会的常識の結晶にしていつの世にか或人之を創稱して万人之に和し、遂に社会に風行し、其の或るものは今日猶用ひられて千万無量の意味を一句半語に寓し。物語は社曾生活の精髄的縮図にして、或は極めて上代に、或は下りて中世に若くは近き過去の人の手に成り、善く社会の興味を刺戟して口々相承けて長く傳はり来れるものなり。

社曾を唯だありの儘に看過ナれば一枚の写真を見るが如し、何等の意義をも斟はず。社曾観察者はありの儘の生活の中に動かぬ風俗習慣の特色あるを認識せざるべからず。風俗習慣を究むるは猶不充分なり。更に其の風俗習慣を一貫する所の精神を看取し、而して其の社曾を統制する所の理想に帰納して、事始めて社会研究の能事畢れりとなすべし。是の社会精神と理想とを完金に発見し得たらんには、これ網の大綱を提げたるにて、為政者社曾政策者の経管施設にも多大の貢献を輿ふ。直ちに民衆の心泉を斟みて此に陶冶の工夫を着くるを得せしむればなり。

庚戌梅雨節　　於京城　　著者識

※物語に見える巫覡、風水、迷信に注目。 16. 「盲者逐妖魔」の中には玉皇上帝、山神、關帝等の鬼神の種類が記述されているが、薄田の先行の記述の書き移しである。

▸楢木末實『朝鮮の迷信と俗傳』(新文社、1913)

※天變地異、期節、鳥獣、魚介、昆蟲、その他多方面の生活に関わる民間の迷信を項目別に列挙し、注釈を付け、巻末に迷信と関わる十編の物語を収録した。

▸今村鞆『朝鮮風俗集』(斯道館、1914)

※楢木末實との関係

▸鳥居竜蔵『日本周囲民族の原始宗教 ： 神話宗教の人種学的研究』岡書院　1924

目次: 日本周圍民族の原始宗教、朝鮮の巫覡、西比利亞のシヤーマン教より見たる朝鮮の巫覡、民族學上より見たる濟州島(耽羅)、人種、考古學上より觀たる鬱陵島、南支那蠻族と其の文化及宗教、猓玀の宗教と神話、猓玀の神話、吾人祖先の石器時代と國津神、

1911年(明治44年)からは朝鮮半島の調査に入る。元来、朝鮮調査は、蒙古満州の調査を始めていた鳥居が出版界の知人の紹介をうけて、寺内総督と合い、嘱託となって始めていたものであった。予備調査を入れ8回にわたる朝鮮調査では、生体測定、石器時代の遺跡、民俗やシャーマニズムが主要テーマであった。

ⓐ巫覡の風俗習慣は、一見道教、一見仏教の如きものであるが、深く調べる時は、彼等の祖

先から今日に伝はって居る処の古い風習の遺物と云うて宜い。朝鮮の風俗習慣に於て、此風習が一番古いものである。畢竟古い彼等の固有宗教の骨組に、道教の衣装を着け、仏教の色彩を施したもので、是等を悉く取り去れば全く昔の面影をしのぶことが出来る。(朝鮮の巫覡 // 緒言一朝鮮の宗教、p.72)

ⓑけれども巫は決して病人ばかりではない、例へば天下泰平、国家安穏、五穀豐饒の祈祷もする。(中略)北青附近の海岸には朝鮮人の無くてはならぬ明太魚と云ふ魚が沢山取れるがそう云ふ所では始終女巫を呼んで祈祷させる。其他新築、船おろしなどにも巫女を招く。然し一般に云ふと矢張病人の為めに祈祷すると云うてよいのである。

(中略)次に朝鮮人は病気に対して大体こんな考を有ってゐる。即ち或悪い霊魂が其人の体内に這入る為に病気になる。であるから体内から其の霊魂が除かれた場合には病気が直に癒ると云ふのである。其霊魂を除き去るのがムータン即ち巫の仕事になって居るのである。其故に巫と云ふものは非常に必要になって居る。病気になっても薬を服まぬと云ふ事は此の原則から来て居るのである。それ故に「巫」は言葉を換へて云へば「体内の霊魂を除き去って病気を癒す人」と云ふ事になる。(朝鮮の巫覡 // 三巫一女巫 // 祈祷、pp.79―81)

ⓒ霊魂が体内に這入るのは、例えば、或霊魂が大変其人に対して恨みを抱いて居るが為に怨をはらそうとして其人の体内に這入り、或は又食物に餓えた霊魂、即ち餓鬼が誰か人間の体内に這入て是を癒やさうと云ふ考へで這入て来る。(中略)而して霊魂は一家親類の者の来るのもあれば、又全く関係ない者の来るのもある。(朝鮮の巫覡 // 三巫一女巫 // 祈祷、p.81)

ⓓ巫女は欺まし賺して、いろいろの方法で引出すこともあるが、又或時には大なる力を示して霊魂を驚かして引出す方法もとる。又或時には戦ふ真似して霊魂を恐れしめて引出す事もある。(朝鮮の巫覡 // 三巫一女巫 // 祈祷、pp.81−82)

ⓔ中央には齋主の舞ふ者が立つ。最初に先づ神棚を拝して、次には四方の諸々の神様を拝する、さうして東西南北四方一切の神々、霊魂、いろいろな神霊を呼出す。此呼出す声と云ふものは不自然ではない、一定の言ひ方で呼出しに来る。寧ろ音楽的になって居る位である。あらゆる神々、神霊を呼出す。唯天地の神々のみならず、色々の災難で死んだ霊魂をも呼集める。(中略)次第に激しくなって倒れる迄舞ふ。其倒れる時は精神状態が非常に変って来て狂人の様になる。それが病人に対して必要な時である。即ち巫女は其時体内に居る霊魂と段々接近し始める有様になって来る。かう云ふ状態になると、女巫は既に一種の神的状態で神霊にとりかかって居ると云ふ意味に自分も考へ、又他の者も考へるのである。斯の如くにして霊魂の体内に潜んで居るのを誘ひ出す。いろいろの神霊の力を女巫にかけて舞踊で誘ひ出す此の仕方が大変妙である。(朝鮮の巫覡 // 三巫一女巫 // 祈祷、pp.82−85)

ⓕ最初病人はその病気が何う云ふ訳で起ったかと云ふことを知る為めに、男覡の処にいかずして先づ売卜者の方に行く。売卜者は、是れは斯う斯う云ふ風の病であるから斯う云ふ神

様に祈れ、また何某の覡に依頼せよと話す。それから今度はその男覡の処へ行って、何某の売ト者に聞いたら斯う云ふ神様に祈ったら宜いと云ったと云ふ。それによって男覡が其神様を主として祈って病を癒す。(朝鮮の巫覡 // 四覡一男覡p.89)

ⓖ北方の男覡は、祈祷の時に最初に先づ東西南北と中との五の神霊を五方に向って拝する。さうして東の方には大きな神様が二十四、小さな神様が二十七あり、西の方には大きな神様が三十六、小さな神様が三十六、南の方には大きな神様が十四、小さな神様が十四、北方には大神が六、小神が六、中央には大神が五、小神が一ある。こゝでは最早五行説になって居るのでる。(中略)北方系のシャーマンには道教の影響が充分ある事が分る。(朝鮮の巫覡 // 四覡一男覡 // 祈祷、p.92)

ⓗ女の巫女の勤めはどう云ふことをするのかと云ふに、先づ祈祷をする。祈祷にも色々あるが、例へば人が病気になると、其病人の所へ行って祓をする。或は旱魃とか云ふやうなことがあると、それは悪い霊魂の為であると云ふ所から、其霊魂を和ぐる為の祈祷をする。或は船の祈もすれば、森、池、山、丘其他総てのものに就ての祈をするのである。(西比利亞のシヤーマン教より見たる朝鮮の巫覡 // 六、シャーマニズムより来れる朝鮮現存の習俗 pp.110−111)

ⓘ一体朝鮮人の宗教は何かと云ふと、仏教も行はれて居る。又儒教も行はれて居るけれども、それは上流の一部に行はれて居るのみであって、大部分はシャーマニズムである。(中略)シヤーマンの思想がどれだけ朝鮮人の頭を支配して居るかと云ふに、山とか、河とか、海とか、森とか、丘とか、水とか云ふようなてん然物は勿論のこと、其外家の中、天井、窯、煙突、井戸、路傍、到る処、有らゆる物にスピリットが充満して居る。であるから船に乗っても、山に行っても危険であると考えて居る。人が病気になるのは其スピリットの荒身魂が身体の内に入るからである。又其人の運が悪く、色々の災難が来ると云ふやうなことも、やはり悪い霊魂の憑いた為めである。故に其悪い霊魂に霊魂に憑かれないやうにしなければならぬと云ふのである。(pp.111−112)

ⓙ斯様に朝鮮の巫女と云ふものはスピリットと人間との間に立って居るものである。其故に予言をする。例へば今年は飢饉が来るとか、疫病が流行するとか云ふやうなことを云ふ。其は霊魂が巫女に憑り移って云はせるのであると信じて居る。であるから朝鮮の巫女は啻に霊魂を追払ふのみあらず、尚自分がスピリットのンスピレーションに感じて色々なことを言ふ。或は死んだ人の霊魂が憑移ると云ふやうにも考えて居る。(西比利亞のシヤーマン教より見たる朝鮮の巫覡 // 六、シャーマニズムより来れる朝鮮現存の習俗 p.117)